



TITLE:

フランス勤工儉學運動小史(上)

AUTHOR(S):

森, 時彦

CITATION:

森, 時彦. フランス勤工儉學運動小史(上). 東方學報 1978, 50: 191-252

ISSUE DATE:

1978-02-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/66551>

RIGHT:

フランス勤工儉學運動小史（上）

森 時 彦

はじめに

第一章 フランスへの道

一、留佛儉學會

二、勤工儉學會と中佛教育會

三、參戰華工の到來

第二章 救國思想を求めて

一、留佛勤工儉學會

二、勞工神聖

三、五四運動の衝擊（以上本號）

第三章 分裂と再生（以下次號）

一、勤工儉學生活

二、二八闘争

三、リヨン進軍

第四章 共產主義運動

一、理論闘争の深化

二、中國共產黨旅歐總支部

三、反帝反封建闘争

むすび

はじめに

舊中國の上海は、帝國主義の血ぬられた手が中國全土から略奪してきた富を象徵する都市であつた。黃浦江のほとりに林立するビル群は、その近代的な装いの中に、中國侵略をすすめる帝國主義の中樞をおさめていた。アヘン戦争以來、上海を基地として奪いさられた財貨ははかり知れない。

日本郵船の因幡丸が、この港をはなれて何度目かのヨーロッパへの航路についたのは、民國八年（一九一九）三月十七日、午前十一時であつた。その朝、埠頭では八十九名の若い中國人學生が、見送りの歡呼の中、期待と不安のいりまじつた面持ち

で、祖國の土に別れを告げようとしていた。かれらの行先きはフランス、「共和主義の母國」フランスであった。その國で、かれらは工場の労働者となり、中國の獨立、富強をかちとるための知識と技術を修得することになっていた。『労働と勉學(勤工儉學)』の生活をたえぬいて、數年後に祖國へかえってくるとき、いま眼前にかれらを壓して立っている帝國主義の牙城を、根底からくつがえすにたる力量が、かれら一人一人に蓄わえられているであらう。そのような期待が、送る者、送られる者それぞれに胸にひめられていた。そのためにこそ、この若者たちは、四川、廣東、江蘇、山東、江西、湖北、湖南などの地方から、あらゆる障害をのりこえて上海に集い、萬里の波濤をこえてフランスに赴こうとしているのである。

『第一次留佛勤工儉學生』八十九名は、この日から數えて五十五日目の五月十日に、フランスのマルセイユに到着した。この第一陣以後、五四運動のあと七月までの三ヶ月間のブランクを除いて、毎月のようにほぼ百人單位の勤工儉學生が、上海をはなれてフランスへ向った。そして、一九二〇年末までには約千六百人の中國人學生が、フランスで働らきつつ勉學する『勤工儉學』の生活をおくる狀況となった。辛亥革命前の一九〇五年に、一萬人近い中國人學生が日本に留學したという記録はあるが、それにしても遠く船で二ヶ月もかかるフランスに、これだけ多數の留學生がでかけていったことだけでも、常に非ざる事態といえる。それにもまして注目すべきことは、傳統的に肉體労働をさげすんできた中國の知識人の末裔が、たんに學費をかせぐという消極的な意味からではなく、積極的に肉體労働の神聖さをうたい、肉體労働と頭腦労働との分裂を、自己の一身において止揚する意氣込みで外國に學び、血と汗の奮闘の中から、マルクス・レーニン主義の眞理をつかみとろうとしていたという事實である。

この事柄の本質を理解するためには、われわれはまずなによりも、フランス勤工儉學運動が「五四の產物」であったことを認めなければならない。五四運動をさかいにして、中國の思想界は、社會主義思想が一世を風靡するにいたった。ロシア十月革命による勞農政權の樹立と、五四運動における労働者階級の登場とは、來るべき世界が労働者階級の手ににぎられていることを、先進的な知識分子におしえた。かれらにおいては、すでにブルジョア民主主義的な價值觀は崩壊し、社會主義の曙光こ

そが中國の未來を輝す一筋の光明であると意識されていた。勞働と勉學の一致というフランス勤工儉學運動の理念は、このような五四時期の社會主義思潮を背景にして生みだされてきたのである。

本稿の立場は、フランス勤工儉學運動を、たんなる中國留學史の一齣ととらえるのではなく、明確に五四運動史の一環として措定するところにある。この立場にたつとき、フランス勤工儉學運動の歴史をひもどくことによって、われわれは少くとも二つの成果を期待できると考える。

第一に、辛亥革命から國民革命へ、換言すれば舊民主主義革命から新民主主義革命へという中國革命の發展と、その結節點としての五四運動を、一つの側面から射照するケーススタディを提供できること。第二に、前者と不可分な關係であるが、中國共產主義の源流としての、フランス勤工儉學生の共產主義運動を追究することによって、初期中國共產黨史におけるほとんど空白に近い數ページを補う作業の端緒がえられることである。以上二つを當面の課題として論をすすめていきたい。

第一章 フランスへの道

一、留佛儉學會

フランス勤工儉學運動⁽¹⁾に先行する活動として、われわれはまず民國元年（一九一二）の留佛儉學會を一瞥しておかなければならない。五四運動時期に隆盛をみたフランス勤工儉學運動は、李煜瀾、蔡元培、吳敬恆らによって組織されたが、かれらは辛亥革命のころに、その先驅形態ともいふべき留佛儉學會を設立していたのである。ここで儉學會にふれるのは、たんに勤工儉學運動の先祖調べをしたいという動機だけからきているのではない。兩者が辛亥革命と五四運動の二つの異なった社會背景のもとにすすめられた運動であり、わずか六年の時間をへだてているにすぎないにもかかわらず、その様相をおおいに異にし

ており、その相違を明確にすることによって、辛亥から五四への社會變化を知るうえでの好個の材料を提供できると考えるからである。

二千年來の専制王朝に終止符がうたれ、アジア最初の共和國が生まれた民國元年は、たしかに光明に満ちた年であつたにちがいない。教育の方面でいえば、光復會さらに遡れば對露同志會以來、革命活動に従事し、ドイツ哲學を學んだ理想主義者として知られていた蔡元培が、南京臨時政府の教育總長に就任した。蔡元培は民國元年二月八、九、十日の『民立報』に、「新教育に對する意見」〔『蔡子民先生言行錄』北京新潮社、民國九年刊に收録する際、「教育方針に對する意見」と改めた^②〕を發表し、就任の抱負を述べた。かれの究極の理想は、世界觀教育と美感教育によって、政治を超越した教育を實現することにある。世界觀教育とは、現象世界を超越した實體世界の存在することを認識させ、美感教育という手段によって實體觀念を把握させようというものであつた。

教育の目的は、究極的にはこの兩者におかなければならないが、弱く貧しい新生共和國において、當面の課題はやはり富國強兵であつた。蔡元培は、したがって軍國民教育、實利主義教育、公民道德教育を當面の教育方針として掲げた。對外的には、歐米列強の侵略に抗し、國內では軍人の跋扈を抑制するための國民皆兵が軍國民教育であり、武力のうらづけとなる財力をやしなうための實業教育が實利主義教育である。しかし、富國強兵一本よりの政策は、往々にして私闘と侵略を助長するものである。また、資本家と勞働者の鬭争も熾烈化するにちがいない。これらの弊害を避けるためには、第三の公民道德教育が重視されなければならない。公民道德とはなにか。フランス革命のスローガンであつた自由、平等、博愛にほかならない。蔡元培は、自由を「義」、平等を「恕」、博愛を「仁」と、それぞれ中國のことばにおきかえて説明を加えているが、それは便法であつて、自由、平等、博愛に道德のすべてがあらわされていると説くところに主眼があつた。富國強兵の軍國民教育と實利主義教育は、フランス流の道德に裏づけられてこそ完結するものであつた。^③

政治を超越した教育が、究極の目的であるにしても、その必要不可欠な前段階として、富國強兵と道德教育を説く蔡元培の

主張は、かれ自身の理想主義と、中華民國の教育總長という立場からくる現實主義とが交錯した議論ではあるが、當面のところフランスのブルジョア民主主義教育を一定の模範形態とする教育論であつた。蔡元培は、袁世凱の專横による唐紹儀内閣の退陣にともない、在職七ヶ月にして辭職し、ほとんどその教育論を實踐にうつすいとまもなかった。しかし、教育總長が理想主義的な教育政策を掲げたこと自體が、民國初年の希望にみちた雰圍氣を傳えているといえる。

留佛儉學會は、共和國成立の興奮がさめやらない民國元年二月(?)に組織された。提唱者は、蔡元培及び李煜瀛、吳敬恆、張繼、張人傑、褚民誼らの、パリアナキストグループであつた。かれらは、一九〇七年パリでアナキズム雑誌『新世紀』を發刊して以來、公然たるアナキストグループとして活動していた。そのかたわら、かれらはいくつかの工場、商店も經營していた。一九〇六年には、シンガポールから漢字を購入し、パリ市内サンテ街 (Rue de la Santé) に「中華印字局」(Imprimerie Chinoise) を設立し、アナキズム關係の刊行物を印刷した。また、李煜瀛は、大豆の研究に興味をもち、一九〇八年パリ郊外のコロンプに「豆腐公司」(Usine Caséo-Sojaïne) を設立し、豆腐、豆乳などの大豆食品を生産した⁽⁴⁾。これらの工場では、李煜瀛の故郷である河北省高陽縣あたりの農民が招かれて勞働していた。フランス語をまったく知らないこれらの勞働者に対して、李煜瀛らは、語學ばかりでなく一般教養をも含めた教育を、勞働の合間に施した⁽⁵⁾。それは必要に迫まれたことではあるが、同時にかれらのアナキズム的な理想主義が、勞働と勉學の一致を求めた結果でもあつた。

辛亥革命によって滿洲王朝が崩壊すると、かれらはその活動を中國國內に廣める衝動にかられた。武昌蜂起の知らせをきいた李煜瀛らは急遽歸國し、汪兆銘の指揮下に京津同盟會を結成した⁽⁶⁾。だがアナキストグループの根底にある關心は、個人と社會との關係であつた。「社會においては、個人が基本單位である。多くの個人が一緒になつて村ができ、多くの村が一緒になつて國(國家ではなく地方のことである)ができ、多くの國が一緒になつて社會ができる⁽⁷⁾」。したがつて、社會改良の第一歩は常に個人からはじまるのであつて、その逆ではない。かれらは、政黨結社の運動よりは、むしろ個人の完成、特に個人道德の完成を急務と考えた。舊社會の腐敗しきつた道德から脱して、新しい道德を樹ちたてることがその目ざすところであつた。

殊に、辛亥革命によって政治改革が「成功」した以上（少なくともかれらはそう思った）、今後の課題はよりいっそう、新しい社會にふさわしい新しい道徳を備えた新しい人間の養成を、大いに進めることでなければならぬ。また、そのための土壌もできたわけである。

その最初の試みは、「進德會」の結成であつた。民國元年二月、汪兆銘、李煜瀛、吳敬恆、張繼らが發起人となつて、「廣く海内有道の士を徴して相ともに邀約し、社會のためにこれが風聲を樹」てることをめざして、個人道徳の研鑽とともにすすめる進德會を設けた。民國が樹立されても、舊社會の腐敗した根株を去らないかぎり、潑刺たる元氣を回復することができない。進德會は、舊社會の根株の中でも、淫賣、賭博、蓄妾がもつとも普遍的な形態であるとみなし、「普通會員」には、この三惡を最低限、犯さないことを義務づけた。「特別會員」は甲部、乙部、丙部の三種に分かれ、さらに詳細、嚴重な規律が課せられた。⁽⁸⁾要するに、進德會は、傳統的な讀書人階級が、舊惡から脱して新生共和國の指導者に恥じない人間に生まれかわろうとする道徳改良運動であつた。

これに對して、留佛儉學會はあきらかに、まだ舊惡に染まっていない無垢な青年に期待する活動であつた。李煜瀛らは、フランスにおいて中國人勞働者を教育した實績をもち、しかも共和主義の祖國フランスを敬慕する念は、だれよりもつよかつた。フランスで共和主義建設の人材を育成しようという構想が、かれらの頭に浮んだのも蓋し當然であらう。「諸先生〔吳敬恆、蔡元培、李煜瀛、褚民誼、張繼、汪兆銘〕の、この教育運動あるゆえんは、實に歐洲近世文明の『科學眞理』『人道主義』の二大要素を、本國に輸入せんと欲すればなり」⁽⁹⁾。

留佛儉學會の活動が本格化したのは、民國元年五月である。『北京日報』、『民立報』などに、「留佛儉學會緣起及び會約」が掲載され、廣く會員を求めた。その前文には、「社會を改良するには、まず教育を重んず。世界文明を内國に輸さんと欲すれば、必らず泰西に留學するを以て要圖となす。ただ西國の學費は、宿に浩大を稱す。その事至つて普及しがたし。……いま共和はじめて立つ。新社會、新國民を造らんと欲すれば、更に留學にあらざれば濟すなし。しかも尤も民氣民智先進の國を以

て宜しとなす。茲に同志により留佛儉學會を組織し、以て勤儉苦學の風を興し、以てその事の實行を助けんとす⁽¹⁰⁾」とうたわれていた。アナキストの發起した團體にふさわしく、會長を設けず、會員の推舉で同志數人が義務を分擔することと定められた⁽¹¹⁾。儉學會の當面の課題は、フランス留學のために、おもに語學を教える預備學校の設立であつた。

この課題も、民國元年四月に安定門内、方家衚衕にあつた順天高等學堂の舊址を蔡元培の盡力で借りうけることができ⁽¹²⁾、解決した。留佛儉學會預備學校の生徒募集廣告が『北京日報』に掲載されたのが五月十五日であり⁽¹³⁾、開校が五月二十六日であつたことからすれば、かなり急造の學校であつた事實は否めない。しかし、運営は齊如山（パリ豆腐公司の責任者で、演劇研究家として有名）を中心に、順調になされた⁽¹⁴⁾。語學教師には、外交部顧問であつたドルモン（鐸爾孟 André d'Hormon）の無給奉仕をうけることができた⁽¹⁵⁾。第一期生は、ほとんどが一月前に中學校などを卒業したばかりの、女性二名を含む二十數名で、これは中國における最初の男女共學といわれている⁽¹⁶⁾。カリキュラムは、午前中にフランス語二時間の必須科目があり、午後は選擇科目の數學と國語があつた。修學期限は六ヶ月と定められ、期末に語學試験を受け、合格したものが、留佛儉學會の幹旋でフランスに赴くことになつていた。

學生は全員が寄宿舎にはいり、教室、食堂、便所の掃除はいうまでもなく、食事の給仕も學生が分擔した。學生がまだ特權階級で、ボーイにかしづかれていた當時の一般的狀況からすれば、これは破天荒のことで、進德會員に課せられた規律が、預備學生にも求められていたことになる。また、フランスでの日常生活に慣れるために、最初の一ヶ月はナイフとフォークを用いて洋食ばかり食べることが義務づけられた⁽¹⁷⁾。このような預備學校の生活を通じて、學生たちは、清末の士大夫にさげすまれていた外國語の修得に勵み、勇躍フランスに赴く日にそなえた。最初六ヶ月とみこまれた修學期間は、四ヶ月に短縮され、八月には四川省出身の十數名が第二期生として入學してきた⁽¹⁸⁾。

そして、早くも十一月には、第一期生、第二期生の合計四十名餘りが、シベリア鐵道經由でパリに向つたのである。かれらは十二月二十日、パリ南方一〇〇キロばかりのところにあるモンタルジ（Montargis）の町に到着した。第一期生はモンタル

ジ中學校の預備學校に收容され、第二期生は工業職業學校の預備學校に收容された。⁽¹⁹⁾ここで、かれらはフランス語の訓練をつづけるかたわら、大學あるいは専門學校入學に備えて、ほかの學科の授業もうけた。一九一四年八月に勃發したヨーロッパ大戰は、留學生たちの身のうえにも暗いかげをなげかけ、戦火を避けるためにかれらは西南へ、西北へとフランスの各地に疎開した。しかし、多くのものは初志をつらぬき、パリ大學、ツールーズ大學などに入學し、數年後には學位をえた。

一方國內では、第一陣が去ったあと、十一月中に新たに六十名餘りの預備學生が集まり、そのうち四十名餘りが翌年六月三日にパリへ向け出發した。⁽²⁰⁾こうして、節儉の生活による安價なフランス留學をめざした留佛儉學會は順調なすべりだしをみせた。李煜瀛、齊如山らはかなりの自信をえて、五年以内に三千人の學生をフランスにおくりこむのだと公言してはばからなかった。⁽²¹⁾事實、この儉學會方式は民國元年から二年にかけて、一時の流行となり、吳玉章らが四川留佛儉學會を組織して預備學校を少城の濟川公學に設けたのをはじめ、上海ではまったく同じ方式で、留東儉學會（東は日本のこと）、留英儉學會などが組織されるに至った。⁽²²⁾しかし、儉學會が軌道にのりはじめていたころ、すでに宋教仁暗殺、善後借款の強行締結など、袁世凱の反動政策もあらわになりはじめていた。

袁世凱の反革命策動は迅速であつた。六月には、國民黨の牙城である江西、安徽、廣東の三都督を罷免あるいは左遷して挑發し、國民黨の武裝蜂起をまっけて、これを壓倒的な武力で壊滅させた。九月三日南京陷落を以て、第二革命は敗北に終り、孫文らは日本に亡命した。留佛儉學會の國內における運命も、この第二革命とともに終つた。李煜瀛、吳敬恆、蔡元培らは第二の故郷フランスに亡命し、方家衚衕の預備學校は、教育総長汪大燮の命により閉鎖された。⁽²³⁾結局、留佛儉學會は、前後二回、合計八十名餘りの學生をフランスに送りだしただけで活動停止におひこまれたのである。

節儉という個人道德の増進と、共和の祖國フランスへの安價な留學とを組みあわせた留佛儉學會は、當時の知識人に清新な刺激を與えた。たしかに、舊清朝時代には、國費留學生は、一人當り年に約千二百元を要したのにくらべ、留佛儉學會がぐりかえし宣傳した六百元の費用というのは安價であつた。しかし、夫婦と子供二人、下女、車夫各一人の中産階級の家庭で、一

月の生活費が、七十七・五元であった當時（一九二二年）の物價水準⁽²⁵⁾からすれば、六百元という金が、どれほど巨額であったか想像できる。したがって、いかに比較的安價であるとはいえ、留佛儉學に應募できた人々が、ごく限られた階級であったことはあきらかである。吳敬恆が留佛儉學會の宣傳のために語ったことばではあるが、「尋常の富家の子弟、つねに京華あるいは滬濱に逍遙するに任さる。ただ、以て安分の遊戲をなし、偶爾に擺酒門牌して往往にして年に千金を擲つ。もし、これらの子弟を擧げて、誘いて西行せしむれば、國に家にみな大益あり⁽²⁶⁾」⁽²⁶⁾といっているのは、そのあたりの事情をよくあらわしているともみることができよう。

これには誇張があるにしても、留佛儉學會が、おもには新生共和國の指導層を形成する人々の子弟を対象にし、かれらを遊戲、放蕩から保護し、將來の指導者にふさわしい人格と學問を授けようとする機關であったことはたしかである。げんに留佛儉學生の中からは、憲法學者として有名な鄭毓秀女士、物理學の李書華、化學の李麟玉、農學の徐廷瑚、建築學の汪申、蔡元培の長男で獸醫學を専攻した蔡無忌など、ブルジョア學者としては一流の人物が輩出した。この點からいえば、對象が富有階級の子弟に限られていたにしても、留佛儉學會はその所期の目的を、ある程度達成したことになる。

しかしながら、かれらが歸國したあかつきに、その學問を十二分に發揮して、建設に貢獻するはずであった共和國そのものが、袁世凱の反動によって有名無實化してしまったとき、かれらのブルジョア學問はその活用の場合自體を失なってしまうたのである。辛亥革命がなげかけた一條の光明の中で、留佛儉學會は、そのブルジョア革命が順調に發展することを前提にして成立した留學運動であった。かつて、腐敗した滿洲王朝のもとで、日本留學が、「ただ『學事』にのみ専念する⁽²⁷⁾」留學でありえなかったという事實はよく知られている。あまりにも有名な魯迅の幻燈事件に象徵されるように、清末の留學生にとって、學問のための學問をすることは許されず、それは救國革命のための學問でなければならなかった。「學事」を活かしうるような祖國をつくりだすことが、革命のために闘った日本留學生たちの悲願であった。南京臨時政府が成立したとき、かつての悲願が現實のものになるかにみえた。そこで、共和國のために活かしうる「學事」を追究することを標榜して、留佛儉學會の留

學運動が登場した。しかし、第二革命の敗北は、それが一場の夢にすぎなかったことをまざまざと證明し、再び救國のための學問を要求したのである。ここで、われわれは、反革命の嵐がふきあれる中國國內からしばらく離れ、李煜瀛らの亡命先であるフランスに眼を轉じなければならない。

二、勤工儉學會と中佛教育會

國內に據點を失なつた留佛儉學會の指導者は、次々にフランスに赴いた。パリ郊外コロンブの世界社（一九〇七年、李煜瀛らが創立した文化交流機關）が、かれらの假住となつた。週に一度モンタルジの儉學生たちのところに出かけては、講演をしたり、よもやま話にふけつたりするのがなぐさめであつた。⁽²⁸⁾ 國內から傳わってくるニュースは、着々と進む袁世凱の獨裁體制、革命派の處刑など、一つとして明る材料はなかつた。失意のかれらをまちうけていたのは、それだけではなかつた。

一九一四年六月、サラエボでオーストリア皇太子を狙撃した銃弾が、ヨーロッパ諸國を帝國主義戰爭にかりたてた。ドイツ軍の快速進撃がまたたく間にパリへとせまり、フランス政府は一時ボルドーへ疎開のうき目をみた。儉學會の指導者と學生も、八月には戦火に追われてフランス西南部のツールーズにのがれた。不安にかられた學生たちは、しきりに歸國の念にかられたが、蔡元培らは、この未曾有の大戦争が、世界文明に「一莫大の紀念」をとどめる歴史的事件であり、社會組織に大きな變化をもたらすものとみとおし、「みな以て吾人の蹈常習故の耳目を新たにし、その研究に資するに足る」⁽²⁹⁾と、學生たちに説き、ふみとどまつてその歸趨を自分の眼で見守るよう勧めた。そして、戦禍で送金の途絶えた中國人留學生を救済するため、留佛西南維持會という組織を結成した。⁽³⁰⁾

フランス軍が九月にマルヌの戦いでドイツ軍の鋭鋒をくじき、西部戦線が膠着状態にはいつて、學生たちもようやく落着きをとirmどしたが、それもつかのま、日本帝國主義が「對支二十一ヶ條要求」をつきつけたというニュースが、一九一五年二月二十五日に至つて、フランスの新聞に報道された。蔡元培、李煜瀛らのグループは、ただちに「禦侮會」を組織し、斷固と

して反對する決意を表示しようとした。⁽³¹⁾しかし、遠くはなれたフランスにあってできることといえ、五月七日の最後通牒、五月九日の屈辱的な承認という一連の破局的な報道を、唇をかみしめながら耳にすることぐらいであった。

祖國が悪化の一途をたどっていく鬱々たる日々に、蔡元培らの腦裏に去來した思いは知るすべもない。結果だけからみれば、労働者とりわけ在佛の中國人労働者の啓蒙、教育に意義をみだし、その實現に努力をかたむけるようになったことが、この苦悶から生まれた結論である。かの有名な蔡元培の「勞工神聖」というスローガンも、フランスでの労働者との親密な接觸なしには考えられないであろう。

蔡元培は、労働の意味を次のように説いた。「いやしくも、一人その工を捨てて事とせざるあれば、すなわち人類の中、必ずその弊を受くるものあり。ここを以て作工を吾人の天職となす」⁽³²⁾。人間關係の最も基本的な授受は、労働の生産物の交換にほかならない。それ故に労働こそ人間の天職である。これが蔡元培の到達した労働觀であった。しかし、労働の技術は人間の天性ではなく學んで得るものである。「掃除のように單純な労働でも學んでこそ巧みになる」。したがって、労働のための學問が必要なことはいうまでもない。が、人間の知識欲はかぎりがなく、そのような學問だけで満足できるはずがない。さらに労働をこえた學問を追究しなければならない。「吾國の古人に、桶匠^{おや}を以て易を談ずるものあり、餅師^{もちや}を以て詩を吟ずるものあり。易と桶、詩と餅とは、相渉らざるがごとし。而も學を好むやかくのごとし。然らばすなわち、吾人の即工即學以外に、また特別の學問なかるあたわざること、誣⁽³³⁾うべからず」。

かつて、豆腐公司の労働者が實行していた「工を以て學を兼ねる制度」は、その後、ディエプ(Dieppe)人絹工場の中國人労働者にうつがれていた。これらの労働者は、人絹工場の要請により、齊竺山(齊如山の兄)が勸工公司という名義で、一九一三年に中國國內から募集してきた人々であった。翌年この工場を參觀した蔡元培、李煜瀛、吳敬恆らは、「工を以て學を兼ねる制度」の長所を労働者たちに教え、その制度の實行を提唱したのである。⁽³⁴⁾四十八人の労働者がよびかけにこたえて、積極的に「工學制度」を組織したとき、蔡元培らは講師となつてその活動を援助し、フランス語や倫理あるいは哲學を教えた。

ディエプ人絹工場の業餘學校で學んだ人々の中から、さらに「工學制度」を普及させる動きがでてきた。それをうけて在佛勞働者の中心になっていた李廣安、張秀波、齊雲卿の三人が、一九一五年六月、「勤工儉學會」という組織を發足させたのである。⁽³⁵⁾「勤工儉學」ということばの由來は、この團體の宗旨からきている。すなわち、「本會は工作に勤め、儉にして以て求學し、以て勞働者の智識を進めるを以て宗旨となす」。勤工儉學會の會員は二種に分かれ、實際に勤工儉學する者を實行會員とし、勤工儉學はしないが、この意に賛同し盡力しようとする者を贊助會員とした。その運営も、留佛儉學會のときと同じように、一定の職務もなく、一定の會費もなく、各會員が能力に應じて發展に盡し、各種の事業も各會員が随時に組織して實行するものと定められていた。⁽³⁶⁾

當初のうち、勤工儉學會は會員もわずかで、活動も教養講座の開設と、フランクリン、ルソーなどの傳記をおさめた『勤工儉學傳』（蔡元培の序を附す）の出版ぐらいのもので、あまり目ざましい存在ではなかった。留佛勤工儉學會の祖型であるという點で、勤工儉學會の成立は重要な意味をもつが、あくまで、それは勞働者の業餘活動であり、蔡元培らの描いた勞働者像にもとづく啓蒙教育の範疇をでるものではなかった。いわば、本來それは蔡元培らの教育計畫全體の一部分にすぎないのだが、亡命の逼塞状態のもとで、まず實行可能な部分から着手したものとみるべきであろう。

蔡元培らがフランスでおこしたいま一つの事業に、中佛教育會の設立がある。勤工儉學會がもっぱら中國人勞働者の啓蒙を目的とする組織であったのに對し、中佛教育會は、フランスと中國の學術・文化交流を促進する機關として設立された。それは、フランス文化に對する蔡元培らの限らない尊敬と熱愛の結果であった。

留佛儉學會以來、フランスは常に、中國の教育を改善する指針として意識されてきた。その主要な理由を、蔡元培らは教育の普遍性にもとめた。人類のもっとも普遍的にして悠久なる事業は教育にほかならない。教育が普遍的であるためには、共同の規範を必要とする。だが、現在の教育は、君主と教會という二つの障害物によって共同の規範をもちえず、むしろ各民族の對立を助長する道具に化してしまっている。ただしフランスの教育のみは、「革命が成功し、共和が確定してより、教育界す

でに君政の遺毒を一洗し、一八八六年、一九〇一年、一九一二年の三次に、律を定めてより、また教會の黴菌を一掃⁽²⁷⁾したのでいまでは君主と教會の障害を克服している。この故に、フランスの教育は普遍的であり、中國の「師」となすにたるのである、と蔡元培は説く。

しかも、その教育の内實としては、フランス革命の生みだした自由、平等、博愛の三大主義があり、それを支える科學主義がある。蔡元培の認識では、孔子から黃宗羲にいたる中國の傳統的な學説は、すべて民政の精神をそなえ、宗教的な色彩をおびていない。この事實から考えると、中國の教育も君主と教會の障害をのりこえることが容易であり、フランスに學ぶことによって、その普遍性をまし、科學性を扶植することができる、⁽³⁸⁾というのである。

一九一六年三月二十九日、パリの自由教育會を借りて、中佛教育會の發會式が開かれた。中國側からは、蔡元培と李煜瀛、フランス側からは、衆議院議員ムーテ (Moutet) とベルナル (Bernard) が演説にたち、中佛文化交流の意義を説いた。そして、六月二十二日に同じ會場で成立大會が開かれ、中佛教育會が正式に發足したのである。各役員は、中佛雙方から同數ずつが選ばれた。會長には、フランス革命の研究者として著名なオラル (Aulard) と蔡元培、副會長にはムーテと汪兆銘、書記にはベルナル、法露 (ファルー?) と李煜瀛、李麟玉がそれぞれ就任した。この席で「中佛教育會大綱」が承認されたが、その第二條で、活動方針を三つに分けて定めている。

一、哲理と精神の部分 フランスの新教育を傳達することを務めとなす。中・佛文の書籍と報章の編輯、印刷も、その任務である。

二、科學と教育の部分

甲、中佛學者の諸團體を聯絡すること。

乙、學問機關を中國に創設すること。

丙、多數の中國留學生をフランスに招くこと。

丁、フランス人が中國に遊學するのを助けること。

戊、留佛の勞働者教育を組織すること。

己、フランスに中文學校あるいは講習班を創設すること。

三、經濟と社會の部分 その活動は、中佛兩國の經濟關係を發展させ、華工教育の組織を促進すること、フランス國民の平等、公道の諸誼を標準とする。³⁹⁾

第一の部分についていえば、一九一六年八月十五日に創刊された『旅歐雜誌』と、ツールで發行された『旅歐教育運動』というパンフレットがそれにあたる。『旅歐雜誌』は月刊で、ヨーロッパ事情を中國國內に伝えることを目的とし、特に勤工儉學會の活動と華工の狀況に力をいれて報道した⁴⁰⁾という。『旅歐教育運動』は、フランス留學の手引書で、この國への留學が“科學眞理”と“人道主義”を中國に輸入する最短の道であることをつよく訴えるものであった。第二部分の甲と乙は、中國側の代表がすべて亡命者であった狀況からして、すぐに實行に移せる性質のものではなかったが、後年北京に中法大學が設立されたことで實現をみた。この二つと丁を除いたほかの活動方針は、いずれも華工教育と中國人留學生の招致に關係することばかりである。

これから考えると、中佛兩國の文化交流という將來の遠大な目標は掲げているが、中佛教育會設立の直接的な動機は、大量の參戰華工のフランス到來を豫想して、それに對應する教育機關のヘゲモニーをにぎることと、第二革命で挫折した留佛儉學會を再興することにあつたといえる。實際にも中佛教育會は、十五萬人にも及ぶ參戰華工の到着で、フランスでの活動範圍を廣げ、さらに第三革命の開始と袁世凱の憤死で、中國國內にも活動の地盤をえて、中佛兩國に足場をもつ機關に發展することができたのである。

三、參戰華工の到來

中佛教育會がまちうけていた參戰華工は、一九一六年八月二十二日に第一陣一千七百名餘りがマルセイユに到着した。第一次世界大戦の長期化により、フランス國內の勞働力不足は深刻の度をまし、フランス政府はイタリア、ギリシヤなどからの勞働者を歓迎する一方、陸軍省の植民地兵工局を通じて、アフリカ、ベトナムの植民地から勞働者を徵發した。それでもなお勞働力不足は解決せず、フランス政府はついに華工（中國人勞働者）に白羽の矢をたてたのである。

華工のフランスへの流入は、大きく分けると三つのルートを経由していた。前代理財政總長で袁世凱の資金調達係であった梁士詒の「惠民公司」が第一のルートであり、李煜瀛がフランス政府の委託をうけ雲南、廣西から募集してきたのが、第二のルートであった。そして第三のルートは、國內で職にあぶれた華工が、威海衛などの港から三三五五、自由にフランスへ渡ってきたものだった。人數からいえば、第三のルートが最大で、約十萬人。第一は、三萬五千人、第二は實數がつかめないが、上海、香港、カナダ、東南アジアから流入した分として記録されている一萬人餘りの中に含まれるのであろう。結局、第一次世界大戦の間にフランスに職をえた華工は、約十五萬人であった。

第三のルートは、まったく分散的に流れこんでいったため、その實態は容易につかむことができない。これに比べれば、前二者は、いずれも民間團體の仕事であるとはいえ、バックにはフランス政府と北京軍閥政府がひかえていたので、比較的详细な調査、統計がのこされている。

惠民公司の計畫は、一九一六年二月、フランス陸軍將校、トリュプティル（Trupitil）の來華を以て具體化しはじめた。これより先、フランス駐華公使コンティ（Conty）は、本國政府より中國での招工計畫推進の命をうけ、西山に隱棲していた交通系の領袖梁士詒を訪れ、その相談をもちかけた。これに對して、梁士詒は、ヨーロッパ大戦に對する中國の中立をたてに、兩國政府間の直接交渉を避けるようにすすめ、第三國の干渉をまねかないように、梁士詒の經營する交通銀行が出資して、民間

團體を設立し、これによって労働者の募集、輸送を実施することを提案した。この提案がフランス側の承認をえて、「惠民公司」が設立されたのである。

フランス政府は、ただちに惠民公司との交渉をはじめため、トリュプティルを派遣した。もちろん、ドイツの干渉を考慮して、陸軍將校ではなく、農學技師の肩書きをつけてであった。來華後、トリュプティルは、惠民公司經理の梁汝成（交通銀行經理）と、細部の調整を二ヶ月にわたってすすめ、五月十四日、二十八ヶ條からなる「招工合同」の調印をみた。⁽⁴³⁾この協定の細目を述べる餘裕はないが、要は五十フラン（當時一元は約二フラン）の「安家費」（留守家族手當）、四十フランの賃金前拂いおよび往復の船賃で、労働者を惠民公司とフランス陸軍の管理下にいれ、五年間にわたりフランス人普通労働者のほぼ半分の賃金で働かせることを定めたものであった。特に、第一條には、外交的な紛糾の惹起を恐れて、決して戦争に關連する任務につかせないことを明記していたが、フランス國內に受入れてからは、この條項に頓着するけはいはなかった。また、華工がフランス人民とまったく平等の權利を享受することを定めた條項もあったが、⁽⁴⁴⁾華工とフランス女性の結婚問題がおこると、この條項も反古にされた。⁽⁴⁵⁾

惠民公司の招工總機關は、北京東交民巷に設けられ、その下に天津をはじめ各地に分公司が設けられた。天津分公司は、一九一六年七月十一日、第一陣千七百二人を送りだしたのを皮切りに、同月二十四日までに三回、五千名餘りを塘沽港から船出させた。しかし、殘留家族との間に「安家費」の支給をめぐる紛糾を起し、招工を繼續できなくなり、分公司を香港に移さざるをえなくなった。香港分公司の設立は、十六年十二月で、五回にわたり、三千二百名を送りだしたが、十七年一月には浦口分公司、同八月には青島分公司が設立され、それぞれ、十四回一萬八千九百名餘りと、三回四千四百名餘りとをフランスへ送った。⁽⁴⁷⁾こうして、惠民公司が扱った華工は、一九一八年十月までに、三萬五千人以上にのぼったが、華工一人につきフランス側の正規の手數料が百二十フラン（約六十元）、そのほか惠民公司は、少し過大な數字だが華工一人から闇の手數料約百元をだましとっていたというから、交通銀行と梁士詒は、この合法的な「人身賣買」で、五百萬元以上の利益をえたわけである。⁽⁴⁸⁾

一方、李煜瀛のルートは、梁士詒の利益獨占を妨害し、フランス政府の覺えをめでたくするために作られたものである。梁士詒とコンテイの交渉がすめられていたころ、李煜瀛はフランス政府に獻策し、梁士詒のような官僚にまかせておくと、ゴロッキ、流民を送りこんできて、フランスの風紀を害するおそれがあるから、招工の件は留佛儉學會にまかせ、雲南、貴州、四川、廣西などから、誠實な農村の子弟を募集してき、教育機關を設けて、語學と科學知識をほどこせば、中佛兩國の利益になると忠告した。⁽⁴⁹⁾

李煜瀛の強調する、惠民公司との相違點は、第一に、惠民公司がもっぱら金もうけをもうけているのに對して、自分のそれは、中國人民の生計を擴張し、實業の知識を輸入し、中國社會の風紀を改良することを目的としている⁽⁵⁰⁾、第二に、惠民公司の章程では、華工の待遇はフランス人労働者にはるかに劣り、しかも、賃金から飲食起居にいたるまで、すべて会社が支配しているのに對し、自分の方は、すべての經濟問題は、華工が工場主と直接交渉する、⁽⁵¹⁾という點にあった。

李煜瀛の獻策がうけいられ、フランス招工局は留佛儉學會と共同して、中國の西南各省から若い農民を招く事業にのりだした。招工局の委託で、李廣安（勤工儉學會の發起人の一人）と齊連登の二人が一九一六年四月に歸國し、雲南、廣西から千二百人の労働者をフランスにつれてきた。⁽⁵²⁾このルートが、その後どれほどの役割を果たしたかを示す資料は、いまのところ見當らないが、中國國內に據點をもたない李煜瀛らのグループが、交通銀行という大組織を向うにまわして苦戦をしいられたことはたしかである。

こうして、約十五萬人の華工がフランスへ向け中國の港を離れた。最初、希望峰まわりの航路では、約三ヶ月を要し、野菜の缺乏から脚氣などの病人が續出した。後に、スエズ運河あるいはパナマ運河經由に改められたが、一九一七年二月、華工九百人の乗っていたアトス號が地中海でドイツの潜水艦に撃沈され、五百四十三人が亡くなるという痛ましい事故もおこった。⁽⁵³⁾ようやくの思いでフランスに到着した華工は、フランス軍に三萬七千弱、イギリス軍に約十萬、アメリカ軍に約一萬とふりわけられ、その管轄下にはいった。⁽⁵⁴⁾その職場は、ほとんどフランス全域に散らばっていた八十餘りの工場で、軍器、火藥、彈藥

などの軍直轄の工場から、鐵鋼、造船、礦山、軍用房屋・工場、軍需輸送などの軍需産業まで多岐にわたっている。⁽⁵⁵⁾ 半数以上は、カレー、ダンケルクなどのフランス東北部に送られたという。

各工場では、軍隊式に十四人を一班として班頭をおき、四班を管理するものを總頭、四總頭を管理するものを監工といった。⁽⁵⁶⁾ 十時間勤務が原則であったが、戦時下で嚴守されるはずもなく、またフランスの風土になれないところから病いに倒れる者も多くでた。國務院僑工事務局が駐佛公使胡惟德に命じて行なわせた調査では、破傷風、腎炎、腸結核、肺結核など實に五十數種類の病名を擧げている。⁽⁵⁷⁾ しかし、華工の犠牲はやはり戦闘によるものが最大であった。「招工合同」第一條に明記された條項はあつてなきに等しく、一九一七年八月に中國が參戰してからは、まさに派兵にかわる代償として、華工が大ぴらに前線にくりだされ、塹壕掘りや彈藥輸送の苦役につかされた。銃をもたない「兵隊」は、ドイツ軍の砲彈に裸でさらされ、カレー、ダンケルクで、一七年八月から翌年四月までの間に、約百三十名が犠牲となつたのをはじめ、第一次大戰終結までに、約二萬人の犠牲をだしたといわれている。華工の墓は、フランス各地いたるところの町にみられ、ブローニュ、ノワイエルの兩墓地には、それぞれ一千の墓がいまも並んでいる。⁽⁵⁸⁾

當局側の資料では、華工の待遇にフランス政府は細心の注意を拂つていたと、事ごとに強調している。しかし、當時外人労働者の受入れ機關が二つに分かれ、イタリア、ギリシャなどの白人は、軍需省の外國勞工局、アジア、アフリカの各植民地からの労働者は陸軍省が管轄する制度のもとで、華工は後者に分類された⁽⁵⁹⁾ という一事からみても、すでに華工が植民地人なみの扱いをうけていたことがわかる。また、その待遇が決して當局側のいうとおりでなかったことは、嚴重な監視のもとにおかれていたにもかかわらず、なお二十六回にも及ぶストライキ闘争及び叛亂が敢行されたという事實が、なによりも明白に物語っている。二十六回の中、七割が中國の參戰以後に集中しているのは、前線に動員され、外交問題に配慮することなく酷使されるようになったからであろう。原因はさまざまで、軍隊なみの過酷な紀律、體罰に對する不滿、食糧不足、さらには死兵の軍服を着せられた不滿などが記録されている。⁽⁶⁰⁾ 例えばイギリス軍に使役された華工の體罰に、「釘十字架」(三時間を限度に、手

足を十字架にしばりつける罰」というのがあり、すこぶる華工の反感をかったという。

北京軍閥官僚の金もうけの道具として賣りわたされてきた華工は、フランス帝國主義の戦闘補助員として、砲火のもと劣悪な條件で長時間の苦役につき、あるいは病いに伏し、あるいは砲彈のえじきとなった。二萬の亡骸は、一九一九年パリ講和會議の席上で、中國は實質的な參戰行爲をおこなっていないという日本の説を論駁するためにのみ、中國の軍閥政府に利用されたのであった。

これら大量の參戰華工に教育を施すことが、中佛教育會のフランスにおける最大の事業であつた。一九一六年五月華工學校が、まずその手はじめに開校された。教師には、蔡元培、李煜瀛らが當り、學生には華工、留佛儉學生など二十數名が最初に入った。⁽⁶¹⁾ 蔡元培はここでも倫理を講じた。その講義案は『華工學校講義』全四十篇として残されている。内容は社會性、公共性を説くところが多く、「華工の向來免がれざるところの缺點を修補し、曲喻してこれを善導する」⁽⁶²⁾ 性質の講義であつた。つまり、中佛教育會も、華工の中に不良分子が多くまじっているという豫斷のもとに、かれらの善導を企圖していたわけである。この點で、華工の急進化と叛亂をもっともおそれていたフランス政府にとって、中佛教育會はまことに望ましい團體であつたといえる。後に留佛勤工儉學生の中佛教育會に對する批判として、李煜瀛一派がフランス政府にとりいり、自分たちのフランスでの地位を高めるために、この機關をつくつたのだという聲があつたのも、由なしとしない。

しかし、中佛教育會の華工教育は、パリ周辺にかぎられていたので、その「恩恵」をうけたのは華工の極く極く一部分であつた。また、當時の中佛教育會の人員では、それが精一杯のところであつた。華工への影響力でいえば、YMCAの方が中佛教育會をはるかにしのいでいたようである。アメリカのYMCAが、アメリカ在住の中國人會員であつた史桂陸らをフランスに派遣し、華工教育に當らせたのが、そのはじめであつた。かれらは、フランスのYMCAと協力しながら、各地に散在する華工の宿舍に赴き、近くにバラックをたてて住みこんだ。そこでは、英語、フランス語、中國語の講習會を開いたばかりでなく、講演會、演藝會を催したり、圖書館や賣店を設けたりした。⁽⁶³⁾ 中佛教育會に屬する人物の記述によると、いささか羨望と嫉

妬をこめながら、YMCAがその豊富な資金力をバックに「不正」な手段で、華工への浸透をつよめていると指摘した。⁽⁶⁴⁾

このように多彩なYMCAの活動の前に、中佛教育會は、華工への直接的な働きかけをあきらめ、『華工雜誌』の販賣擴張というマスメディアの手段と、通譯の教育、養成を通じて、間接的に華工への影響を廣める方針に轉換した。『華工雜誌』は、『旅歐雜誌』の姉妹雜誌で、編集には勤工儉學會があたった。拼音字母を附した白話文の平明な文章で、第一次世界大戰の状況や中國國內の動向を報道する一方、「勤、儉、學」を、幸福で立派な人生に到達し「工界改良」を行う方法であるとして、くりかえし華工にさとした。この雜誌は半月刊で、一九一七年一月十日に創刊され、三年半にわたって五十期以上刊行された。⁽⁶⁵⁾そして華工の増加につれ、約一千部を發行するまでになったといわれている。

また、參戰華工についてきた通譯は約四百人であったが、中佛教育會はバリに「繙譯講習班」を設けるとともに、その「函授科」(通信教育科)を開き、かれらの再教育をすすめる計畫をたてた。講習班では、「勤工儉學の模範人材を造就」することを第一目的とし、フランス語及びその教授法、算學、圖畫などの科目を設けることになっていた。⁽⁶⁶⁾しかし、こちらの方は、中佛教育會の計畫どおりにはいかず、實施の運びにはいたらなかった。ちょうどその頃(一九一六年末)になると、蔡元培が北京大學校長に招聘されて歸國したのをはじめ、第三革命の進展による國內狀況の變化にともない、中佛教育會の主要メンバーの歸國が相繼いだ。これを契機に中佛教育會は、參戰通譯の再教育を放棄し、むしろ中國國內で「勤工儉學の模範人材を造就」してフランスに送りこむ方式を摸索するに至った。そもそも、フランス勤工儉學運動の提唱は、この中佛教育會の方針が、その發端となったのである。

共和主義の指導者の安價な養成からはじまった李煜瀾、蔡元培らの活動は、國內外の激しい政治變動に左右され、華工の啓蒙教育から、いままた新たな方向に發展することになった。フランスにおいては、あくまで労働者の業餘學習といった程度の意味しかもっていなかった「勤工儉學」が、五四前後の新文化運動がもえさかる中國國內にもちかえられるとき、それは青年學生の思想運動の一つの核にまで止揚されることになるであろう。

注 引中の()は原注、〔 〕は筆者の挿入である。

(1) フランス勤工儉學運動に關する從來の研究成果には、次のようなものがある。

(a) 舒新城『近代中國留學史』上海中華書局 民國十六年刊の第八章「勤工儉學與留法」

(d) Conrad Brandt The French-returned elite in the Chinese Communist Party. Berkeley, University of California, 1961 (Center for Chinese Studies, reprint no. 13)

(c) Robert A. Scalapino and George T. Yu The Chinese Anarchist Movement. Berkeley, University of California, 1961

いまは、丸山松幸譯『中國のアナキズム運動』紀伊國屋書店 一九七〇年刊による。特に、第三章「工讀(勤勞—勉學)運動」。

(v) Annie Kriegel Communismes au miroir français. Paris Gallimard, 1971. Chapitre III. Aux origines françaises du communisme chinois

(e) 寺廣映雄「留佛勤工儉學運動について」『歴史研究』十一 大阪教育大學歴史研究室 一九七四年三月刊所收。

(a) は、ほとんど同時代史であり、『安徽教育月刊』の留佛勤工儉學關係の記事を集めているところが特徴である。留佛儉學會の成立から、一九二一年のリヨン中佛大學の設立までを略述しているが、むしろ資料集として用いるべきものである。(b) は、中國共產黨の一流流を、フランス勤工儉學運動に求めたエッセイである。ホーチミンらのベトナム共產主義者に比べ、中國の在佛共產主義者は、フランスの左翼との接觸が少なく、中國國內に比しても、外的な援助が少なかったという指摘は、傾聴に値する。(c) には、丸山氏の解説があるので、特に言及するにはおよばない。第三章で、世界社編『旅歐教育運動』ツール 一九六一年刊、華法教育會廣東支部發行『留法儉學報告』廣東 一九一八年刊など、日本で見られない資料を使っているのが、目につく程度である。(d) は、中國文の

フランス勤工儉學運動小史(上)

文獻を用いていない憾みはのこるが、フランス外務省、内務省、植民地省などに現存している資料を用いている點で、從來知られていなかった多數の事實を發掘した。參戰華工の勞働者主流時代と、勤工儉學的學生主流時代に分けて論述しているが、そこに差違はみとめず、むしろ一貫した流れとしてとらえようとしている。(e) は、日本で最初にフランス勤工儉學運動に注目した論文である。卞孝萱輯『留法勤工儉學資料』『近代史資料』一九五五年第二期所收、何長工『勤工儉學生活回憶』北京工人出版社 一九五八年刊、舒新城前掲書、李璣『留法勤工儉學與中國共產黨』『明報』第四十五と四十七號所收などを驅使して要領よくまとめられ、しかも、勤工儉學生的の共產主義化を、勤工儉學運動の發展としてとらえる視點を提供した。本論も、この論文から多くの示唆をえた。ただ惜しむらくは、勤工儉學會の成立を辛亥革命以前としていること、フランス勤工儉學生的の第一陣は一九一九年八月に到着したとしていること、あるいは國民黨旅歐總支部の成立を一九二二年秋としていること、などいくつかの事實の誤りがある。また、共產主義運動の敘述に、李璣前掲論文、許芥昱著 高山林太郎譯『周恩來』刀江書院 一九七一年刊などという反共的な立場から書かれた材料のみを用いているので、どうしても一面的な見方になってしまっている。

(2) 陶英惠『蔡元培年譜』上 臺北中央研究院近代史研究所專刊三十六、民國六十五年刊 一三三—二四二頁參照。

(3) 蔡元培「對於新教育之意見」『民立報』民國元年二月八日十所載。

(4) 以上、スカラピーノ 前掲書 第一章參照。

(5) 何德鶴「旅法華工的前瞻與後顧」『國民公論』一九三七年四月所收にいう、「這年正是中國的宣統元年、留法華僑李石曾君、研究工業化學、想把中國的大豆食品、推銷到海外、所以在巴黎組織豆腐公司、在河北高陽蠡縣等地方、招募華工三十人來法、這是旅法華工史上的第一聲」。

また、蔡元培「勤工儉學傳序」『蔡子民先生言行錄』北京新潮社

民國九年刊に、「昔者、李石曾齊竺山諸君之創設豆腐公司於巴黎也、設爲以工兼學之制、試之有效、乃提倡儉學會」と述べる。

- (6) 稅西恆等「記京津同盟會二三事」辛亥革命回憶錄」六所收。「當時在北京與同盟會有關的杜洛舟……等協同汪（兆銘）、黃（復生）、羅（偉章）到天津組織京津同盟分會、推汪任會長、李石曾任副會長」。眞「某氏與新世紀書附答」『新世紀』第八號（一九〇七年八月十日）所收での李煜瀾の答。「社會中個人爲本位。合諸個人而爲村。合諸村而爲國（非國家乃地方也）。合諸國而爲社會」。スカラビーノ前掲書 第二章參照。

- (8) 以上、スカラビーノ前掲書 第二章參照。

- (9) 「書報介紹—旅歐教育運動」『新青年』第三卷第三號（民國六年五月一日）所收。「諸先生所以有此教育運動者、實欲將歐洲近世文明之『科學眞理』『人道主義』二大要素輸入本國」。

- (10) 「留法儉學會緣起及會約」『民立報』民國元年五月二十九日所載および「留法儉學會」『北京日報』民國元年五月八日所載。「改良社會、首重教育。欲輸世界文明於內國、必以留學泰西爲要圖。惟西國學費、宿稱浩大。其事至難普及。……今共和初立。欲造新社會新國民、更非留學莫濟。而尤以民氣民智先進之國爲宜。茲由同志組織留法儉學會、以興勤儉苦學之風、以助其事之實行也」。

- (11) 前掲會約。「四、義務 本會無會長等名目。惟由會員中推定同志數人、分任義務」。

- (12) 李宗侗「旅法雜憶」『傳記文學』第一卷第三期（民國五十一年八月一日）所收。「留法預備學校創辦於元年四月、設於北京安定門內大方家衛衙路北順天高等學堂舊址、更在前爲國子監南學。……是時蔡子（民）世丈方任教育總長、遂將其地撥歸預備學校」。開校は實際は五月である。

- (13) 「留法儉學會特別廣告」『北京日報』民國三年五月十五日所載。「現由同志組織留法儉學會、以節省費用爲推廣留學方法。每年每人五六百元即可足用。較赴日本留學所費無多。有意赴法留學諸君、乞到本

會面商、或函索詳章亦可。並由本會組織預備學堂、教授法文法語。定于新歷五月二十六日開學。願入學者、乞早期報名爲荷。留法儉學會啓（本會辦事機關、暫設北京船板衛義興局）」。

- (14) 齊如山「齊如山回憶錄」臺北中央文物供應社 民國四十五年刊。「蔡子民、吳稚暉、張靜江、李石曾、張溥泉諸位商量、決定發起辦一留法儉學會、在北平先設一預備學校、請我主持其事。……於是我也只好應允、後該校辦的很好、一切飲食都在校中、借以講究西洋生活的規矩、招的學生也很多」。

- (15) 李宗侗 前掲文。「法文由鐸爾孟（André d'Hormon）擔任、這是他自己的要求、由法使館所保薦。他不支薪水、只由學校備馬車接送」。

- (16) 李書華「十年留法」『傳記文學』第三卷第四期（民國五十二年十月一日）所收。「第一班同學除海帆（徐廷瑚）與我以外、有李宗侗（玄伯）、李宗侃（叔陶）、汪申（申伯）、彭濟群（志雲）、陳揚傑（子英）、樂祐（佑申）、樂禪（篤周）、樂襄、聶國樞（培元）、聶國華、魏樹棠（耀東）、魏樹勳（希堯）、姜鍾周、姜鍾鑑、張紹程（張紹曾之弟）、馮啓球、徐學洛、雷善勳等、又有女同學鄭毓秀（即後來之魏道明—伯聰夫人）與章以保（即後來之唐在彰夫人）二人、合共二十餘人。這是中國男女同班上課最早的學校」。

- (17) 李宗侗 前掲文。「留法預備學校的組織在當時甚爲特殊、雖未用學生治校的辦法、但實行學生在校服役……。每個樓上的宿舍及在樓下的自修室皆歸其屋中同學自理、飯廳及洗手間則分組輪流打掃、開飯時端菜飯亦由同學擔任。第一個月完全吃西餐、以備熟習用刀叉」。

- (18) 李書華 前掲文。「第一班於民國元年四、五月間開學上課。上課後約四個月第二班同學余順乾（子元）、謝田、李乃堯、胡謬鈞、朱廣儒、朱廣相、朱廣才等十餘人亦到留法預備學校。第二班同學幾全爲四川人」。

- (19) 李宗侗 前掲文。「民國元年十二月二十日、乘火車往蒙達邑（Montargis）、五叔（李煜瀾）竺山（齊竺山）同行。蒙邑距巴黎南正一百一十公里、在巴黎里昂馬賽（P.L.M.）鐵路沿線。……是時同來校者

預備學校第一班學生皆入男中學、而第二班同學只十餘人皆入工業職業學校。

(20) この時には、二人の貧兒院の兒童が參加して話題になった。

「貧兒赴巴黎求學」『教育雜誌』第五卷第四號(民國二年七月十日)所收。「六月三日、爲留法儉學會第二班留學生出發之期。早八時前齊集東車站約四十餘人。內有北京貧兒院貧兒二人、一名張守正年十二歲直隸人、一名楊宏遠亦十二歲湖南人、楊兒善於演說。其院長臧守義君乃北方之慈善家、新自歐洲調查慈善事業歸來、亟知彼土教育之完善。故特先派二兒前往、俟得大宗經費、當續遣撥十名繼之以資造就高尚人才。臨行時車站送別者極衆。……貧兒院學生楊宏遠答曰、我們此行乃欲求其實學而非出洋遊玩。他年學得實業歸國、當不使中國再有窮苦之人、即亦無不能求學之人。但須與諸君共相勉勵以求實學。更願諸君亦能赴歐美文明各國就學云云。」

ただし、このような例はこの二人にとどまるようであつて、留佛儉學會の基本的性格に變更をくわえるほどのものではない。

(21) 吳敬恆「答友人問留法儉學會書」『中華教育界』民國二年三月號所收。「昨日與校中主持人齊如山先生閒談、在發起人張靜江李石曾汪精衛褚重行諸先生之意、彼等在法國、希望於五年內將有三千學生由儉學會西去」。

(22) 「北京留法儉學會預備學校」『東方雜誌』第十四卷第六號(民國六年六月十五日)所收。「無何朱芾煌吳玉章沈與白黃復生趙鐵橋劉天佐諸君、發起四川儉學會、設預備學校于少城濟川公學」。

(23) 同前文。「吳稚暉俞仲還陳仲英張靜江諸君、發起上海留英儉學會」。

「留英儉學會意趣書」『東方雜誌』第九卷第九號(民國二年三月一日)所收では、留佛儉學會との關係を、「彼此相通。留英儉學會、暫設於上海四川路二擺渡橋下一百廿八號。留法儉學會、設於北京安定門內方家衛街。欲往英國或法國兩處、均可入會報名」と述べている。

留東儉學會については、「留東儉學會意趣書」『民立報』民國二

フランス勤工儉學運動小史(上)

年七月十三日所載を参照のこと。

(24) 前掲「北京留法儉學會預備學校」。「當二次革命時、儉學會頗爲專制政府所嫉視。北京預備學校舍、爲教育部收回、遂移之于皮庫營四川會館。政府仍多方巡察、以致全體解散」。

(25) 宇高寧「支那勞働問題」上海國際文化研究會 大正十四年刊 二八九頁。

(26) 吳敬恆 前掲文。「尋常富家之子弟、每任逍遙於京華或滬濱。但以爲安分遊戲、偶爾擺酒門牌、往往年擲千金(曾有一天津某師長之子、在都中狂嫖狂賭。其父聞有儉學會甚喜、強使附學。然此子野性不改、在學止一日。仍出舍於外、反以儉學會誑人、致聞者有儉學不儉之說、遂除其名。此子固年擲數千金於虛耗也)。若舉此等子弟誘使西行、於國於家皆有大益」。

(27) さねとうけいしゅう「增補 中國人日本留學史」くろしお出版 一九七〇年刊 四一四頁。

(28) 陶英惠 前掲書 四四二～四四四頁参照。

(29) 蔡元培「吾儕何故而欲歸國乎?」『蔡子民先生言行錄』北京新潮社民國九年刊所收。「此次戰局、爲百年來所未有。不特影響所及、人權之消長、學說之抑揚、於世界文明史中必留一莫大之紀念、而且社會之組織、民族之心理、其緣此戰禍而呈種種之變態者、皆足以新吾人蹈常習故之耳目、而資其研究」。陶英惠 前掲書 四四八～四四九頁参照。

(30) 李書華 前掲文。「當大戰初起時、許多中國自費生及留法儉學會學生、都收不到國內匯款、大起恐慌、群起向駐法公使胡維德請願其設法接濟。蔡子民與李石曾兩先生遂組織留法西南維持會、對於未能收到國內匯款學生臨時予以接濟、因得渡過難關」。

(31) 陶英惠 前掲書 四五三頁参照。

(32) 蔡元培「勤工儉學傳序」。「苟有一人焉、舍其工而弗事、則人類之中、必有受其弊者。是以作工爲吾人之天職」。

(33) 同前。「吾國古人有以桶匠而談易者。有以餅師而吟詩者。易之於桶、

詩之於餅、若不相涉也、而好學也若是。然則吾人之於即工即學以外、又不能無特別之學問、不可誣也。

(34) 何德鶴 前揭文。「民國二年、法國地浹泊(Dieppe)地方的人造絲廠、需要工人。由齊竺山君用勸工公司的名義、從國內招來華工四十八人。民國三年、吳稚暉、蔡元培、李石曾、褚民誼諸君、參觀地浹泊人造絲廠、對華工演述以工兼學制度的優點、並提倡工學制度。」

(35) 蔡元培「勸工儉學傳序」。「繼豆腐公司而起者、有地浹泊(人造絲)廠諸君。人數漸增、範圍漸廣。於是李廣安張秀波齊雲卿諸君、按實定名、而有勸工儉學會之組織。由此勸於工作而儉以求學之主義、益確實而昭彰矣。」

舒新城 前揭書 八八頁。「民國四年六月組織勸工儉學會、以勤於工作、儉以求學為目的。」

(36) 「留法勤工儉學會一覽」『教育公報』第四年第十三期(民國六年十月)所收。

宗旨 本會以『勤於工作儉以求學以進勞動者之智識』為宗旨。

會員 本會由同志結合而成。凡表同情於本會者、皆為會員。會員之性質有二。

甲、以工求學者為實行會員。

乙、本身非以工求學而贊成此意、欲有所盡力者為贊助會員。會務 本會無一定之職務、亦無一定之會費。惟各人由力之所能、以助本會之發展。或各人實力求學、或助導他人求學、或以書說之著述演講為傳達、或經濟為傳達之資助、皆由會員隨時組織而實行之。

(37) 蔡元培「華法教育會之意趣」『蔡子民先生言行錄』所收。「法國自革命成功、共和確定、教育界已一洗君政之遺毒。自一八八六年、一九零一年、一九二二年、三次定律、又一掃教會之黴菌。」

(38) 以上、同前。

(39) 「旅歐華法教育會一覽」——林子勛『中國留學教育史』臺北華岡出版有限公司 民國六十五年刊 三四二—三五六頁所錄(原載『教育公報』第四年第九期)。なお、同書は留學史關係の雜誌論文などを裁斷せず全文收録する原則であるので、資料集としては重寶である。

華法教育會大綱
宗旨與組織
第一條 茲由同志結合團體名曰華法教育會、年期無限、會所在巴黎。

第二條 本會宗旨在發展中法兩國之交通、尤重以法國科學與精神之教育、圖中國道德、智識、經濟之發展、其作用分三部分如下。

(一) 哲理與精神之部分 以傳達法國新教育為務、如編輯刊印中法文書籍與報章、亦其職任。

(二) 科學與教育之部分

(甲) 聯絡中法學者諸團體。

(乙) 創設學問機關於中國。

(丙) 介紹多數中國留學生來法。

(丁) 助法人遊學於中國。

(戊) 組織留法之工人教育。

(己) 在法國創設中文學校或講習班。

(三) 經濟與社會之部分 其作用為發展中法兩國經濟之關係、與助進華工教育之組織、以法蘭西國民之平等公道諸誼為標準。

(40) 中共中央馬克思恩格斯列寧斯大林著作編譯局研究室編著『五四時期期刊介紹』第三集 北京人民出版社 一九五九年刊 一九七—二〇三頁參照。

(41) 參戰華工の問題を扱った從來の研究成果には次のようなものがある。

(a) 白蕉「世界大戰中之華工」『人文月刊』第八卷第一期、第三期、第六期、第九・十期所收。

(a) P. Wou Les Travailleurs chinois et la Grande Guerre. Paris, 1939.

(3) J. Blick The Chinese Labor Corps in World War I. (Papers on China IX) Harvard U. P., 1955.

(4) 陳三井「華工參加歐戰之經緯及其貢獻」中央研究院近代史研究所集刊『第四期(民國六十二年五月)』所收。

(a) は、梁汝成『招工回顧錄』を主體に『申報』『東方雜誌』などの「各史料を排比」した資料集である。(b)(c)は未見。(d)は、中央研究院近代史研究所に所蔵されている『惠民公司招工檔』(一)(二)を最大限に用いた論文である。論文に引用されているところからみると、『惠民公司招工檔』なる檔案資料は、『國務院僑工事務局調查在法華工情形書第一〇五次披露』『新中國』第一卷第一號、第三號、第四號(民國八年五月、七月、八月)所收の原資料であるように思われる。陳三井論文では、檔案資料を本文に組み入れて紹介している箇所が多いので、本節では、陳三井論文を参照しつつ、引用に際しては「國務院僑工事務局調查在法華工情形書」(以下「僑工局調查書」と略す)を利用することにする。

(42) 「僑工局調查書第一次披露」。(一)華工在法人數 歐戰以後陸續到法計、(甲)由惠民公司介紹前往者三萬五千人、(乙)由威海各口岸自由赴法者約十萬人、(丙)由上海香港坎拿大或南洋各地轉赴法國者約一萬餘人。

(43) 岑學呂『三水梁燕孫先生年譜』上 民國二十八年序刊本 三〇〇頁。「遂接納法國駐京公使康梯(Conty)氏之介紹、與該國軍部代表陶履德上校(Colonel Trupit)訂定工約合同。我方則由梁公士詒指派李兼善王子祺爲工約主稿。……凡諸工約、經半年談判、方成條文。遂於中華民國五年五月十四日由駐華法公使以全權擔保法國農學技師陶履德君簽字。梁公士詒以交通銀行經理梁汝成爲惠民公司經理、出而簽字。雙方簽定、復呈請我國外交部備案、乃開始招工焉。ここで「半年の談判を経て」といっているのは、コンティと梁士詒の接觸がはじまってから半年ということである。

(44) 白蕉 前掲論文。「招工條件 第一條 中國工人、決不用於何項戰

フランス勤工儉學運動小史(上)

事職務、僅係爲在法國或亞智理及摩洛哥各種實業及農業之使用」。

岑學呂 前掲書 三〇三頁も参照のこと。

(45) 同前。「第十三條 工人在居留法國時期內、當享有法國法律對於一切國民所保證之自由權、並最要之信教自由權。在工人方面、亦應遵守法國法律。僱主應注視工人、不致受其他工人種種設法之惡待」。

(46) クリーゲル 前掲書六八頁には、Ta Chen Chinese Migrations, with Special Reference to Labor Conditions. Washington Government Printing Office, 1923 を引用して、フランス内務省が、フランス人女性と華工の結婚を禁止した事實を指摘している。また、陳三井 前掲論文 四一〇頁参照。

(47) 「僑工局調查書第二次披露」一九七〇一九八頁。また、白蕉 前掲論文『人文月刊』第八卷第一期 二三〇二六頁参照。

(48) 何長工『勤工儉學生活回憶』北京工人出版社 一九五八年刊(以後、河田第一、森時彦共譯『フランス勤工儉學の回想』岩波新書 一九七六年刊を利用する)。譯書 一三頁。

(49) 同前 一二一三頁。

(50) 「李石曾之移民意見書」『東方雜誌』第十四卷第七號(民國六年七月十五日)所收。「一日擴張生計。我國生齒極繁、而實業未興。內地人民、多求工不得之患。今於歐洲方面、闢一僑工之局、不惟國中可以减少無業之民、而他日殖產興業、尤大有裨於祖國。觀南洋羣島及美洲之華僑、可爲比例。二曰輸入實業知識。我國地產極富。各種工業、必將次第建設。建設工業、非徒待少數之工學士、而亦恃多數實驗之工人均有工業上普通知識。今乘歐洲工廠缺人之際、而以我國人分插其間、則各種工業均有多數實驗之工人。將來回國以後、轉相授受、必能使工業常識普及於人人。三曰改良社會。吾國開化既久、風俗之醇厚、固有過於他族者。而相形見絀、亦復不少。家族之倚賴、婚喪之糜費、陰陽之拘忌、娛樂之腐敗、諸如此類、無可諱言。歐人之知識開明、思想活潑、可爲吾儕之藥石。誠以吾國多數工人、生活於彼國工界中、耳濡目染、吸其所長、他日次第歸國、必有益於社會

教育之進行、而大減阻力。

- (51) 何德鶴 前揭文。「惠民公司之合同、其條件與對於法國工人者迥殊。

法國招工局之合同、其條件與對於法國工人者無異。惠民公司所招之工人、交附工價與飲食起居、悉由公司支配。儉學會代招之工人、一切經濟問題、皆由工人與廠家直接接洽。惠民公司之包辦爲商務之經營、儉學會之代招爲義務之性質」(これは前掲『旅歐教育運動』からの引用である)。

- (52) 同前。「民國五年四月、李廣安、齊連登二君、應法國政府的委託、

回國在雲南廣西一帶、招募華工一千二百餘人到法國」。

- (53) 「僑工局調查書第二次披露」一九三頁。

- (54) クリーゲル 前掲書、六四頁參照。

- (55) 「僑工局調查書第一次披露」。「華工所在工廠、大都爲法國軍械部

(Ministère de l'armement) 管轄之軍械槍炮及火藥等工廠、陸軍管轄之各軍區糧臺及軍衣工程等地、以及海軍部所屬之造船廠等。其中亦有商辦工廠、然與法國國防有直接或間接關係、或供給飛艇船隻砲彈鋼鐵、或代築軍用房屋工廠、或代運軍需及一切工作。據本年三月間工廠單、將有八十處之多、幾遍法國全境」。

- (56) 陳三井 前掲論文 三九六頁參照。

- (57) 「僑工局調查書第三次披露」二〇六、二〇七頁。

クリーゲル前掲書は、ノワイエルの華工共同墓地を訪れたときの感傷から書きおこしている。また、陳三井 前掲論文 四〇三頁參照。

- (59) 同前 三八九、三九〇頁。

(60) 「僑工局調查書第五次披露」二八二、二八四頁。民國五年十一月八日から民國六年七月十二日まで八回、民國六年八月から民國七年五月十八日まで十八回記録されている。僑工局の公式發表だけでこれだけのぼるからには、實際はもっと多發したものと思われる。

(61) 「留法勤工儉學會一覽」。「民國五年、由會中與華法教育會、商組華工學校於巴黎。入校者工界同志二十四人、皆以勤工之積儲、爲求學之資斧。更有少數儉學會同志抱以工求學之志願者、亦入此校」。

- (62) 『華工學校講義』「蔡子民先生言行錄」所收の汪精衛序文。「蔡子民先生手撰華工學校講義。關於德育智育者、凡四十篇。其精神所注、一在保全華工固有之美德、益發揮而光大之、一在修補華工向來所不免之缺點、曲喻而善導之」。

(63) 「僑工局調查書第三次披露」二〇九頁。「美國青年會 美國萬國青年總會、以在法華工人數衆多、乃於中國留美青年會學生中、選派數人來法(如史桂陸諸君)。每月薪金美金一百元、在法組織華工俱樂部、如(Foyer)、如(Lyon, Gievre Prunus)等處、均在舉行、以提倡德智體三育爲主義。惟辦事人、來自美國不能法語、以英文代之。法陸軍部、以該會爲耶蘇教機關、初亦不願彼等與聞華工事。惟該會勢力甚大、法國各地均有分會。加之會款充足、事事易成。於華工駐所旁、或租房屋、或築木棚、爲辦事及講演遊戲圖書之所。並有販賣食品處、工人受益不淺」。YMCAの活動については、クリーゲル前掲書六八、七二頁に詳しい。

(64) 「我國在法之工人與學生」『新中國』第一卷第六號(民國八年十月十五日)所收は、中佛教育會の系列にはいるバリ通信社の報告である。この中でYMCAの活動にふれ、「青年會雖在此間勢力甚大、但皆金錢遊樂引誘、而以拉入基督教爲最終目的。故頗爲識者所病」とそしっている。

(65) 『五四時期期刊介紹』第三集 一九七、二〇三頁參照。なお、YMCAは『華工雜誌』に對抗して、一九一九年春から、『華工日報』という新聞を發行し、二、三千部も販賣したという。「華工日報」銷三千份」『時報』民國八年五月十九日所載。「刻駐法華工、尚有十五萬人。青年會顏祕書、今春爲之刊發一日報。載和會及歐美消息與中國新聞、俾華工亦知世界大事。每日出版、取資甚廉、華工識字者、皆願購閱、已有二三千之銷路云」。「華工日報」については、「佛蘭西に於ける漢文新聞の發行」『支那』第十卷第十四號(一九一九年七月十五日)所收も參照のこと。

(66) 「僑工局調查書第三次披露」二〇九頁。「華法教育會 此會於民國

五年、開辦繙譯講習班、係造就勤工儉學模範人才。現會中復設有星期班、專備中國繙譯往學內、有法文及法文教授法算學圖畫等科。該

會深恐遠道不能普及、又擬設一函授科。

第二章 救國思想を求めて

一、留佛勤工儉學會

一九一六年十一月八日、蔡元培はフランスから上海にたちもどつた。⁽¹⁾ かれの眼に映る祖國は、三年前とほとんどかわりなくみえた。中國を混亂におとし入れた袁世凱の帝制劇も、かれの憤死を以てあつけない幕切れとなつていた。第三革命によつて、後任大總統黎元洪は、南方側の要求をいれ、舊約法の回復、舊國會の召集を聲明せざるをえない立場においこまれた。たとえ、北京政府の妥協策にすぎなかつたにしても、辛亥革命にかぎらない希望をよせた人々にとつて、袁世凱にうばわれたこれらの成果をとりもどしたことは、暗雲に切れ目をみる思ひであつた。蔡元培が北京大學校長就任の決心をしたのも、畢竟共和主義のために教育の分野で、再び自からの微力を盡さんとする決意からであつたかもしれない。

上海に上陸するやいなや、各界から、ヨーロッパでえた知見の披露を求められた蔡元培は、たびたび演壇にたち、教育に對する信念と北京大學校長就任の抱負を人々に説いた。ここでわれわれは、その演説についていちいち検討するにはおよぶまい。愛國女學校でなされた講演の次のような一節をみるだけで、當時のかれの考え方を十分うかがうことができる。蔡元培は、中華民國が成立したことによつて、改革の目的がすでに達せられた現在、眞に愛國の名にふさわしくするためには、「その精神、革命を提唱するにあらずして、完全の人格を養成するにあり」と述べた。⁽²⁾ 曲折はあつたにしても、中華民國の前途によせる蔡元培の基本的な態度には、絲毫も動搖がない。現在の混亂した局面も、「完全なる人格」をそだてていくことにより、漸次改

善していくものと確信しているのである。

また、中國をとりまく狀勢についても、蔡元培の見解は、きわめて樂觀的であつた。「もし、戦争の結果、同盟方面に果して勝利を占めしむれば、すなわち必ず德國を以て歐洲の盟主となし、また即ち世界の盟主となし、かつまさに軍國主義を以て全世界を支配せん。また協約方面をして勝利せしむれば、すなわち必ず人道主義を主張して軍國主義を消滅し、世界をして永久に和平ならしめん^③」。この頃、アメリカの參戰で、第一次世界大戰の歸趨がようやくみえはじめた時期であつた。二つの可能性を指摘してはいるが、當然、協商國が勝利するであろうと豫想していたにちがいない。協商國の勝利は、即ち人道主義の勝利であり、世界平和の確立である。第一次世界大戰が、軍國主義の同盟國と、人道主義の協商國との鬭いにほかならない、という見方は、五四運動の爆發、すなわち賊品分捕會議というパリ講和會議の本質が大衆的に見ぬかれる時點までは、むしろ中國人の十分な支持をえた見方であつた。このように考える蔡元培に、三年間の斷絶はなかつたといえよう。

しかも、第一次世界大戰の趨勢は、むしろフランス革命に源を發する人道主義に有利な方向に展開しつつあるのである。留佛儉學會以來、フランス留學運動の中心人物であつた蔡元培の、このような政治感覺は、同時に中佛教育會のそれでもあつた。共和建設の模範としてのフランスに、出来るかぎり多くの若者を送りこみ、その雰圍氣にひたらせて、人材の陶冶をはかることが、フランス留學を提唱したかれらの一貫した構想であつた。したがって、第二革命での挫折はあつたにしても、フランスの土壤をかりて、中佛教育會の設立をなしとげたかれらは、國內事情が許しさえすれば、再び國內でその活動を再開する用意があつた。蔡元培の北京大學校長就任は絶好の機會であつたといえる。

かれらの思想にかわりがなかつたように、その活動もまず留佛儉學會の再建からはじまつた。一九一七年はじめ、中佛教育會は華林という人物を歸國させ、その任にあたさせた。華林の第一の任務は、留佛儉學會預備學校の再開であつた。北京宣武門外儲庫營に、馬景融によって創設されたばかりの民國大學が、留佛儉學會預備學校のこんどの間借先となつた。發起人には、吳敬恆、蔡元培、張繼、李煜瀛らの創立以來の常連のほか、新たに馬景融、蔡公時、華林、劉鼎生、時明荇、白玉麟、羅偉章、

江季子、夏雷、劉厚、蔡無忌、法露らが名前を連ねた。⁽⁴⁾「費用の節儉を以て留學を推廣し、しかも勞働の樸素を尙びて、勤潔の性質を養成す」という趣旨にかわりがないばかりでなく、「會約」にもほとんど變更はない。ただ、かわりがあるとすれば、以前はシベリア鐵道經由で、二週間あまりで行けたのに、今回は第一次世界大戰の餘波で、海路五十日あまりの旅程に變更されたことぐらいである。

第二次留佛儉學會の宣傳文句には、民國元年から二年にかけて、すでに八十名あまりの儉學生を送り出したという實績が擧げられる。「この種の問題〔儉學の可否〕は、前に儉學會を發起せし時において、固よりすでに言及せり。然れども、なお多く理想に出づ。既にすでに、儉學會百餘人の經驗あれば、もつとも確當となす⁽⁵⁾」。この實績を看板に、留佛儉學會は、『東方雜誌』、『新青年』などの一流雜誌に、「會約」「簡章」などを掲載して、人々の注目をあつめた。そして一九一七年八月には預備學校の開校にこぎつけ、留佛儉學會講演會を開催して、開校を祝った。

演壇には、蔡元培、汪兆銘、李煜瀛、吳玉章らの名士が次々にのぼり、フランス留學の意義を説いた。まず最初に、蔡元培がたち、國內の高等教育機關の數が少なく、質が低い現狀は早急に改善を望めないという理由をあげ、フランスへの留學を獎勵した。ではなぜ特にフランスが適しているのか。第一に、「同人、均しくすでに留佛し、佛國教育界において、吾國の學生に適宜するの點、これを知ることやや詳らか」であること。第二に、「同人の意におもえらく、紳民階級、政府萬能、宗教萬能等の觀念、均しく學問進歩の障礙となすに足る。……ただ佛國のみひとり、これらの習慣」がないこと。第三に、「最儉の費用を以て、正當の學術を求めるを得」ること。第四に、「吾國の學者、頗る研究の耐心あるも、特に發明の銳氣尠なし。尤も佛人の長ずる所を以て、これを補なわざるべからず」。この四點がその理由である。

次いで、汪兆銘は、中國人のフランス觀が往々にして「未だ隔膜を免かれざる」理由として、フランスの植民地主義（特にベトナムに對する）と、中國におけるフランス人宣教師に對する反感が災いしていることを指摘したのち、植民地主義はフランス全體の汚點ではあるが、フランスのすべてではなく、キリスト教に至ってはフランス國內ではすでに衰退してしまってい

ると述べ、フランスに對するわだかまりをとりぬくことを求めた。さらに、フランス革命の破壊性をたてに、フランスを排斥する者に對しては、アメリカ型の共和制とフランス型の共和制を比較し、「吾國の、專制を破壊して共和を建設すること、佛國の歴史と全然相同じ」であるゆえに、ゼロから出發したアメリカよりは、「破壊より得來した」フランスの共和制の方が、中國の模範としてふさわしいと指摘し、最後に「思想の自由」「感覺の敏捷」「進取の活潑」をフランスにみならうべき點として挙げた。

李煜瀛の講演では、特にドイツとの比較において、フランスが自然科学の面でも社會科學の面でも見劣りしない點が強調されたのち、「世界新學說實行の紀元」としてのフランス大革命に注意が喚起された。最後にたった呉玉章は、留佛儉學會の上部機關である中佛教育會の目的を、國民教育の擴張、世界文明の輸入、儒先哲理の闡揚、國民經濟の發達という四點にわたって詳述し、特に華工教育の問題にふれて、「歐戰より以來、各國廣く華工を招く。もし、よく勢によりて利導すれば、ただに國民の生計、以て一舒を得るのみならず、且つ一般の實業の人材を培植すべし。本會、招工合同の改良、華工教育の組織に對して、特に注意をなし、以て國民經濟勢力の發展を圖る」と述べた。⁽⁶⁾

以上、少し長々と紹介した講演會の様子からも、民國元年の留佛儉學會を發起した人々にとっては、フランス留學の意義は民國六年においても、基本的には何ら改定を加えるべき點はなかったことがわかる。ただ一點、かれらの思想に變化ないしは進歩があつたとすれば、それは労働者の啓蒙を重視するようになったことであろう。第一章で既述したように、參戰華工の存在が、かれらに労働者へ眼をむけさせる契機となつたのである。

留佛儉學會の再建が、中佛教育會の中國國內での最初の活動であつたが、同時に中佛教育會は、フランスの土壤で生まれた「勤工儉學」の運動を、中國國內に移植することにも努力をかたむけた。その第一歩は、「保定各鄉村勤工儉學會初級預備學校」の設立であつた。これは、農村の子弟から應募者をつのり、少なくとも一年にわたる「勤工儉學」の生活の中で、フランス語を主體とする一般教養と、實習による製造技術とを授け、フランスでの「以工求學」（労働者が勉學する）にそなえよう

とするものであった。發起人には、李煜瀛、李廣安、張秀波、齊連登ら、勤工儉學會のメンバーのほか、馬如林、段子均、段秉魯らがいた。^⑦保定の蠡縣布里村に設けられたこの預備學校は、以後、陸續と同様の預備學校が設立されることを期待して、「第一預備學校」と命名された。

ここでも、入學の資格には、煙酒、賭博、放蕩の嗜好をもたないことという條件が明記され、李煜瀛らの禁欲主義が前面におしだされている。入學試験は、「淺近の漢文」と口頭試問で行なわれ、定員以上の合格者がでた場合は、ほかの預備學校ができるまで、あるいは次年度まで自宅待機と定められた。毎月百文の學費のほか、生活費は學生の自辦であったが、實習でできた製品を販賣してその補助に當てることも考慮された。なお、卒業後、フランスに赴く二百元の旅費も、學生が自分で工面するのが原則であるが、卒業試験に合格しながら借りる親戚もない學生には、フランスで働いて返済することを條件に、貸與の策が考えられることになっていた。フランスに着いてからの職探しなどは、すべて勤工儉學會が面倒をみてくれることになっていたが、そのためには勤工儉學會への入會と會費納入が義務づけられた。^⑧

農村の子弟を対象とする預備學校が、わざわざ「初級預備學校」とよばれたのは、中佛教育會が、さらに「高級預備學校」をも設立するつもりであったからである。「高級預備學校」は、一九一七年の段階では、まだ一校も實現をみていなかったが、豫定では、二年から三年の修業年限とし、中學校あるいは實業學校の附屬學校として設立するつもりであった。そこでは、フランス語と工業知識の教育がなされ、フランスの工業實習學校と同じような効果が期待された。^⑨フランスでの華工教育が、YMCAに浸蝕されている事態は、宗教色をもっともきらう李煜瀛らにとって耐えがたいものであった。中國國內で有爲な知識青年をつのり、大量にフランスへ送ることが焦眉の急であった。留佛儉學會の再建によって、既成の知識青年をフランスにおくり、華工教育の援軍にするめどはついたが、「高級預備學校」の設立は、さらに多くの「勤工儉學」できたえられた知識青年を養成し、華工教育の實踐部隊にあてゐる意味ももっていた。

中佛教育會の先導のもとに、「初級預備學校」の設立を以て、中國國內に足がかりをえた勤工儉學會は、中國國內でその活

動を宣傳するときには、「留佛」の二字をその頭に冠した。「留佛勤工儉學會」がいつ成立したかは、いまのところ詳らかにしない。しかし、「留佛勤工儉學會」は、決してフランスの「勤工儉學會」と別個の組織としてつくられたのではなく、「勤工儉學會」が、中國國內での呼稱に、「留佛勤工儉學會」を用いたのだと推測すれば、設立の時期が明確でないのは、むしろ當然かもしれない¹⁰。管見の及ぶところでは、『教育公報』四卷十三號（一九一七年十月發行）に掲載された「留佛勤工儉學會一覽」という文章が、この名稱が用いられた最初のものである。したがって、留佛勤工儉學會は、おそらく一九一八年までは、ただその名稱と、初級預備學校をもつだけの組織であり、宣傳事務など實質的な仕事は、ほとんど中佛教育會が代行していたものと思われる。

こうして、中佛教育會は、フランス留學を斡旋する機關として、留佛儉學會と留佛勤工儉學會の二つの下部組織をもち、それぞれの預備學校を設けるまでに至った。もともと、當初のうち、「留佛儉學」と「留佛勤工儉學」に、それほど明確な差別をもうけていたようには思われない。要するに、金銭的な餘裕があれば、儉約しながら勉學一本にうちこみ、その餘裕がない者は、勤工によって學費をかせぎ、そのうえで勉學に着手する、といった程度の相違であった。蔡元培などにおいても、勞働一般に對する賛美はあるが、知識人の勞働者化を主張する意識などはまったくなく、フランス留學の便法として、勞働によって學費をかせぐ方法の方が、たんなる節儉の方法より多くの人々に機會を與える可能性があると考えていたにすぎない。つまり、學生が勞働者となるのは、あくまで留學の手段であって、目的であるとは考えられていなかったのである。

したがって、民國元年のフランス留學運動にくらべ、民國六年以降の中佛教育會のそれは、より廣い階層の人々をフランスへ送るために、方法の多様化に努力した意欲は、たしかに認められる。しかし、中佛教育會に參與した人々の意識では、それは民國元年の方針に修正を加える性質のものでは決してなく、むしろその最初の意圖をより完全に實現するためのものとみなされたのである。フランス留學にかけた中佛教育會の期待、すなわち勞働者、農民をも含む階層に、民主主義教育と職業教育を施したいという期待をみると、われわれは、辛亥革命という不完全なブルジョア革命しかなしえなかった半封建半植民地

の中國ブルジョアジーの屈折した教育觀を感じないわけにはいかない。

封建軍閥支配下の國內教育に對する中國ブルジョアジーの不滿は、當然、封建道德とりわけ儒教道德による民主主義教育の阻害と、工業化を促がすための職業教育の缺如とにあった。『新青年』を中心とする新文化運動が、「打倒孔家店」のスローガンをうちだし、封建道德に對する徹底的な闘いをはじめたのも、ちょうどこのころであつた。しかし、蔡元培が正直に述べたように、初等教育から高等教育に至るまで、中國の教育機關の絶對數不足と質的なたおくれは、封建軍閥支配下では早急に解決されるみこみがなかつた。フランス留學運動は、まさしく國內におけるブルジョア教育の質的、量的後進性を、ブルジョア先進國の教育機關を借りて、補なおうとするものにほかならなかつた。

よく知られているように、第一次世界大戰の勃發は、中國民族資本の發展を促した。その狀況は、常にひかれる次の數字をみても明白である。紡織業では、一九一三年に四八萬餘りであつた民族資本の工場の紡錘數が、一九二一年には一二四萬餘りと三倍近くにふえ、一九一三年に二〇一六臺であつた織機も、一九二一年には、五八二五臺と三倍近くにふえた。また、製粉業では、一九〇一年から一二年まで十二年間の民族資本による新設工場が二五であつたのに對し、一九一七年から二〇年までのわずか四年間に二六工場が新設される⁽¹⁾というように、輕工業部門を中心に、中國の民族資本は、歐米帝國主義が戰爭に忙殺されている間隙に、急速な成長をとげた。國內産業の一定程度の發展にともない、中國の民族資本は、工場労働者ばかりでなく、下級、中級の技術者を必要とするに至つた。民國七年（一九一八）で、國內の工業専門學校十校、學生數九三八人という狀況⁽²⁾は、工場數の急激な増加に比してあまりにも貧弱であつた。

フランス勤工儉學運動が、五四前後に非常な隆盛をみる一つの原因には、技術者を要求する民族資本の援助を擧げることができる。「勤工」という實習を通じて、實業教育はより效果的な實績をあげることができるという、巧利的な打算がかれらの頭にはたらいいたとしても、なんの不思議もない。參戰華工の渡佛に際しても、かれらは、「けだし中國は工程司^{エンジニア}及び精練の工人を急需せり。現に佛國雇用の華人は、各工廠、即ち工人を教練する最良の所在となす」と考え、「佛國の實業教育、よくわ

が國の實業發展に利用されん」ことを願つていたのである。李煜瀛らのグループが、おもにフランス文化の優秀性と共和主義の傳統という、いわば抽象的なメリットを強調したのに對し、民族資本の側の論理では熟練工とエンジニアの養成という、きわめて實利的な効果を、フランス留學運動に求めていたといえる。

その期待するところに、若干重點の相違がなかったわけではないが、中佛教育會の留學運動は、民族ブルジョアジの現實的な要請をくみいれることによって、國內で實際的な支持層をえたのである。何長工の『フランス勤工儉學の回想』では、フランス勤工儉學の手段を知つた経緯を次のように記している。

仲間の職探しに廣東まで足をのぼした羅喜聞は、ある機械工場の事務所の入口に、フランス勤工儉學の規則書がはつてあるのをみつけた。一九一七年冬のことである。「それには責任者の名前もかいてあった。かれはたずねにはいつて、はじめてその責任者の黃強が、工場の工場長であることを知つた。：黃強は規則書を數部あたえ、そのうえ手紙をかい、北京大學の學長蔡元培、教授の李石曾〔煜瀛〕と面會できるよう紹介してくれた¹⁴⁾。この黃強という人物は、のちに中佛教育會廣東支部の理事になつた。中佛教育會の宣傳は、一流雑誌の廣告ばかりでなく、このような協力をえて、廣東の一隅の町工場にも張りだされていたのである。

これは一例にすぎないが、實業界の人物が中佛教育會に協力して、留學運動の斡旋につとめたのは、決して特異なことではなかつた。中佛教育會に關係した人物には、商務印書館發行所所長であつた王顯華、のちに浙江財閥の巨頭になる錢永銘、中國實業銀行の李雍などがいた。長辛店の京漢鐵道工場をはじめ、工場に附設するかたちで、留佛工業預備學校がいくつか設立された背景には、中佛教育會と實業人との結びつきが豫想される。しかし、中佛教育會のメンバーに、どれくらい實業人がいたかは、いまのところあきらかではない。

したがつて、"儉學"から"勤工儉學"への變化は、フランスでの華工教育が、その重要な起點となつたのではあるが、國內における民族資本の勃興が、特に"勤工"に實利的なメリットをみとめ、國內での普及を促がしたといえる。しかし、注意

しておかなければならないのは、この段階では、「勤工儉學」の意味は、「労働者が業餘の勉學にはげむ（以工求學）」という意味が一つ、いまひとつは「勤工という實習をともなった實業教育」という意味、この二つの側面をもっていたが、いずれもブルジョア的な労働観なり教育観からでた發想であつたということである。以後、この觀點は、フランス勤工儉學運動を推進した中佛教育會および留佛勤工儉學會の公式的な見解となつた。

二、勞工神聖

中佛教育會の下部機關である留佛勤工儉學會が、フランス勤工儉學運動を提唱したのは、一九一七年のことである。はじめ中佛教育會や實業界の期待にもかかわらず、そのよびかけは、はかばかしい反響をえたとはいえない。青年たちがフランス勤工儉學運動に積極的に参加するためには「勤工儉學」ということばに、提唱者側の見解をこえた思想的意義づけを施す必要があつた。五四運動をさかいに、フランス勤工儉學運動が、ひとつの思想運動として青年たちの熱狂的な支持をえた背景には、ロシア十月革命に觸發された青年たちの「新思想」へのあこがれと、「勤工儉學」に社會主義的な「肉體労働と頭腦労働の一致」という理想の實現を夢みた青年たちの期待とがあつた。前節では、もっぱら提唱者側の意圖を述べたが、ここではフランス勤工儉學運動の眞の主役であつた青年たちの動きを、五四前後の中國思想界の動向とからまぜながら述べなければならない。何長工の回想では、五四時期の青年たちが、フランス勤工儉學運動の主役であつて、提唱者とは、はつきり異なつた政治的傾向をもつていたと明言している。「勤工儉學が一時期、運動となりえたそのもつとも主要な原因は、ブルジョア學者の提唱や援助にあるのではなく、むしろこれら少數の先進的青年が身をもつて實行した點にあつたのだ。當時、ほとんどの青年たちが、自國の暗黒を痛恨し、出口をさがしもとめていた。さらに、十月革命の影響をうけて、革命を決意しているものもいた。だが、そのころ直接にソヴェトへいくことは困難だつたから、このチャンスに乗じてヨーロッパにいき、労働運動を學ぶと同時に、フランスのプロレタリア革命の傳統を體得しようとしたのである」⁽¹⁵⁾。

この何長工の回想は、中華人民共和國が成立した地平に立つて認められたものであるから、フランス勤工儉學の意義を共產主義の立場からまことに整合的にまとめている。われわれは、當時の青年たちの意識から、細かいひだをとり除き、未來の歴史につながっていく部分だけを抽出した説明を、この記述にみることができる。もちろん、問題解決の糸口がまだだれにもわかっていなかった當時において、青年たちが、フランス勤工儉學をこれほどすっきりと位置づけていたとは考えられず、それはもつと曖昧で不確かな意識であり、提唱者たちともそれほど明確な對立關係にあつたはずもないが、十月革命の影響を無意識にでも受けていた青年たちが、提唱者たちのフランス共和制崇拜の意識とは、まったく異なる動機から勤工儉學運動にくわわったことはたしかである。

一九一七年のロシア十月革命が、中國の青年たちに與えた衝擊は、決して迅速であつたとはいえないが、深く確かなものであつた。意識的な歪曲さえ施こされていた『時報』『申報』などの大新聞が伝えるロシア革命の斷片的な報道の行間から、先進的な人々はロシア革命の世界史的意義を次第につかみとっていった。一九一八年も半ばになると、ロシア革命が二十世紀の世界に、決定的な影響を及ぼす大事件であることに、疑義をはさむ餘地はなくなった。もはや革命の象徴として燦然と輝いていたフランス革命は過去の遺物となり、いまやロシア革命が、新しい時代の革命として中國の未來を左右することになった。例えば、李大釗は「佛露革命の比較觀」という論文を發表し、十九世紀の世界文明の方向を決したフランス革命と、二十世紀初葉以後の世界文明に「絶大なる變動」をもたらずであらうロシア革命の比較を試みた。

李大釗の議論では、フランス革命が愛國精神にもとづく國家主義の革命であつたのに對して、ロシアの革命は「社會主義に立つ革命であり、社會的革命にして同時に世界的革命の色彩をおびたもの」であると對比したうえで、「前者は國家主義に根ざし、後者は世界主義に傾く。したがって、前者は恒に戦争の源泉であり、後者は平和の曙光となすにたる⁽¹⁶⁾」とみなした。フランス革命をはじめとするブルジョア革命が生みだした資本主義社會に對して、李大釗は、レーニン主義的な帝國主義論をかゝるまでもなく直感的に、その本質が戦争の根源であることをみてとり、それに對置するものとしてロシア革命をとらえたの

である。

ロシア革命に對する認識が深まるにつれて、第一次世界大戦に對する認識も變化しはじめた。蔡元培だけでなく、第一次世界大戦をイギリス、フランスのデモクラシーとドイツ、オーストリアの軍國主義、專制主義との戦いにとらえるのは、むしろ普通の見方であつた。しかし、ロシア革命、續いてドイツ革命の勃發は、第一次世界大戦を、ブルジョアデモクラシーの立場から分析して、國家間の對立とのみ把握していたのでは、解釋しきれない情勢をうみだした。一九一八年十一月二十八日、北京で開催された協商國戰勝祝賀大會において、李大釗は、この戰勝が決して協商國の戰勝ではなく、「庶民の勝利」にはかならないと演説した。この中で、李大釗はこの戰爭の社會的結果として、「資本主義の敗北」と「勞働主義の戰勝」を指摘した。「元來、今次の戰爭の眞因は資本主義の發展にあつた。國家の枠内にその生産力を包容しきれなくなったために、資本家の政府が、大戦によつて國家の枠を打破し、自國を中心とする一大世界帝國を建て、單一の經濟組織を作りあげて、自國內の資本家階級のために利益をはかうとしたのである。ロシア、ドイツなどの勞働社會はまさきに彼らの野心を看破し、大戦中であることもかえりみず、社會革命をおこしてこの資本家政府の戰爭を阻止した。…資本主義はかくして敗北し、勞働主義はかくして戰勝した」⁽¹⁷⁾。

ここに至つて、第一次世界大戦を帝國主義戰爭にとらえる視點が獲得された。世界の二極構造は、民主主義國家と專制主義國家の對立ではなく、資本主義と勞働主義、資本家階級と勞働者階級の對立であり、來るべき世界は勞働者階級の世界であつて、第一次世界大戦はその未來への第一歩であると考えられたのである。蔡元培の勞働觀が、ブルジョア的な勞働一般に對する賛美であつたのに對し、李大釗は、資本家階級の敵對物としての勞働者階級をみだし、資本主義社會の墓掘人である勞働者階級にこそ、未來の世界になう資格があることをみてとつたのである。「今後の世界は勞働者の世界となることを知らねばならない。われわれはこの潮流を、すべての人が勞働者となる機會としなければならぬ、すべての人を強盜にする機會としてはならない」。強盜とは、徒衣徒食を貪る輩のことである。強盜としないためには、「この世界で一個の勞働者とならねば

ならないのだ。諸君、すみやかに労働せよ」¹⁸⁾。

階級としての労働者をみいだした李大釗の議論は、五四以前においては、まだ先驅的な突出した議論であったかもしれない。しかし、帝國主義國の贓品分捕會議としてのパリ講和會議の本質が、次第に明白となり、五四運動から六三運動に至って、労働者階級が政治舞臺に登場してその力量を發揮するに及んで、李大釗の正しさは、多くの先進的な知識青年に認められるところとなった。多くの青年たちにとって、労働者とは、たんにブルジョア的な啓蒙教育の對象としてあるのではなく、まさしく未來のある唯一の階級として屹立し、かれらと結びつくかいかいなが、青年の未來への姿勢を決定する分かれ目となるほどの意味をもった存在となった。「現代の新文明を社會にしっかりと根づかせようとするならば、知識階級と労働階級が一つにならねばならない。私は、わが中國の青年がこのことをはっきり理解してほしいと切望するものである」¹⁹⁾と、李大釗が青年たちによびかけたとき、先進的な青年たちは、さまざまな方法で、労働者階級と結合する道を摸索しはじめたのである。

その試行錯誤は、實に多様な形態をとったが、思想的に系列化すれば、トルストイズムの影響をうけた「新村運動」と、クロポトキンの相互扶助論の影響をうけた「工讀互助運動」に大別できるであろう。「新村運動」は、當時の日本の白樺派から學んだものであり、トルストイの労働主義にもとづいて、都市近郊に「半工半讀」のユートピアを築こうとするものであった。「工讀互助運動」の提唱者は、王光祈であるが、もっとも熱心に實踐したのは、北京高等師範學校の工學會と、北京大學の工讀互助團に結集する學生たちであった。この運動は、團員すべてが、印刷、洗濯、寫眞などの労働を、一日に四時間行ない、それをもとに勉學と讀書を主體とする共同生活を營なむ計畫であった。²⁰⁾これを、かれらは「工讀主義」あるいは「工學主義」と命名したが、「工學會旨趣書二」では、「工學主義」を六ヶ條に分けて説明している。その第一條には、「人生には労働と勉學の二つしかないと認める」と規定し、第三條では、「頭腦労働（勞心）と肉體労働（勞力）の區別を打破し、社會の肉體労働者すべてに、讀書——つまり高遠な學問——をさせ、學者すべてに肉體労働をさせること」²¹⁾をうたっている。

これらの運動は、一九一九年から二〇年にかけて青年たちの心をとらえ、北京、上海をはじめ全國各地に「工讀主義」「工

學主義」を標榜する小團體が結成され、一時の流行となった。もちろん、ユートピア運動は、ヨーロッパにおけると同様、ここ中國においても、實踐數ヶ月にして破綻をきたした。しかし、その失敗をまじめに徹底的に總括する中から、やがて、「社會を改造しようとすれば、根本から全體の改造を謀らなければならず、枝葉末節の部分的な改造ではだめである」こと、「社會が根本的に改造される以前には、工讀互助團であれ、新村であれ、新生活を實驗することはできない」ことを覺るようになるのである。

ともあれ、時代はすでにフランス革命に象徵されるブルジョアデモクラシーの没落と、マルクス主義の受容へとつき進む前段階としての社會主義諸思想の爭鳴を告げていた。新文化運動の中心『新青年』も、一九一九年五月發行（奥附）の第六卷第五號で、マルクス主義研究の特集をくみ、儒教批判と文學革命を主軸とする前期新文化運動から、次第に社會主義研究の雜誌に衣がえしはじめた時期であつた。青年たちのフランス勤工儉學運動への關心の高まりも、このような脈絡の中で理解されなければならぬ。蔡元培、李煜瀛ら提唱者のよびかけは、一九一八年中頃になって、青年たちのつよい關心をあつめはじめた。李大釗の突出した議論が、初めてロシア革命の意義をあきらかにした頃であるから、青年たちにロシア革命の本質を把握する力はまだなかったかもしれないが、思潮の變化を敏感に豫知した青年たちが、明確な目標もないままに、新しい時代に即應する身がまえをととのえようとしていた時期であつた。

湖南では、毛澤東、蔡和森らの湖南第一師範學生が中心となつて、一九一七年から準備をすすめていた「新民學會」が、一八年四月正式に結成されていた。この團體は、共同して「救國救民の眞理」を追究して「中國を改造」することを目的とする團體であつた。それは、軍閥支配下の暗黒の湖南で、青年學生が、一筋の曙光を求めて、手さぐりの活動を開始した兆しであつた。かれらは、そのために、「世界でもっとも進歩した思想、學說」を求めて、「省外、國外に發展する」決意であつた。現狀を打破する思想を渴望するかれらに、ロシア革命の經驗は、「もっとも進歩した思想」の所在を暗示した。そのようなかれらのもとに、かつて第一師範で哲學を講じてかれらに深い影響を與え、いま北京大學に奉職している楊昌濟から、フランスで

働らきながら勉強できる機会があることを知らせてきたのは、一九一八年六月のことであった。かれらは新思想を求めて世界にはばたく意気込みにもえて早速、新民學會の會合を開き、フランス留學計畫を討論して、とりあえず蔡和森を調査のために北京へ派遣することを決定した。⁽²³⁾

蔡和森は六月下旬、勇躍北京に赴き、楊昌濟の紹介で、中佛教育會を訪ずれた。しかし、前述のように、當時、民國大學の留佛儉學預備學校と保定の勤工儉學會初級第一預備學校が設立されていただけの状況で、保定の預備學校は入學希望者が多く、とても餘分の入學者を認めることができなかった。そもそも、中佛教育會の組織からして、「北京總會の事務所は方家衛衛にあつた。入口には『中佛教育會』『留佛勤工儉學會』という二枚の看板がかかげられていた。もっとも、なかには一間の事務室があるだけで、その室内にはデスクがひとつと電話が一臺おいてあるにすぎなかった。平素は、事務をとっている人の姿はなく、ただひとり留守番役のこつているだけだ⁽²⁴⁾」という状態であつた。蔡元培、李煜瀛らは、アドバルーンだけはあげたものの、實際に應募者が來た場合の對策を十分にとのえていなかったのである。

しかし、青年たちの熱意は、提唱者の準備不足によって、いささかもくじけることはなかった。むしろ、自分たちの手で道をきりひらいていく勇氣をかきたてられた。蔡和森は毛澤東に報告の手紙を書き、「これ萬も、人數限りあるを以て、その動機を^{とど}遏め、その希望を絶つべからず。まさに另一調劑の辦法を籌し、盡量に容收して、一大組織を成すべし⁽²⁵⁾」と、自からの努力で組織をつくる決意をかためたのである。毛澤東自身も、北京で新思想にふれる目的もかねて、九月には二十人ばかりの會員とともに上京し、フランス勤工儉學の準備活動にはいった。このような状況は、湖南の青年たちに限ったことではなかった。四川、廣東、江西をはじめ、ほとんど全國到るところから、フランス勤工儉學に社會改造の手がかりを求める熱心な青年たちが、中佛教育會へ問合せに殺到した。

毛澤東が北京に着いたとき、別のグループもあわせて、四、五十人に及ぶ湖南の青年たちが、すでに北京に來ていた。毛澤東と蔡和森は、とりあえず前記の二校とは別に預備學校を開設して、湖南の青年たちを收容してくれるように、中佛教育會に

交渉した。その結果、蔡元培が盡力して、長辛店の京漢鐵道工場に留佛勤工儉學會預備クラスが開設されることになった。一九一八年の「焼けつくような炎天のある日」、この預備クラスの成立大會が、方家衚衕の中佛教育會で開かれた。大會は、蔡元培が主宰し、湖南各界の在京名士を招いて、湖南青年のフランス勤工儉學に對する援助を要請し、楊昌濟、胡子靖、王毅、王文豹らを理事にえらび、出國までの世話方を依頼した。この大會のニュースが新聞に掲載されると、ほかの省の學生も續々つめかけてきた。そこで、北京大學と保定の育德中學にも預備クラスが開かれることになった。⁽²⁷⁾その後、北京周邊ばかりでなく、成都、長沙、上海、濟南などにも預備クラスが設けられ、一九一九年三月には、二十餘りになった。⁽²⁸⁾

ひとまず、青年たちが預備クラスに收容されると、毛澤東らはひきつづき、渡佛旅費の調達、各種手續に奔走した。中佛教育會は、湖南の學生たちに、フランス勤工儉學計畫を提出することを求めた。これにこたえて、毛澤東が代表して計畫書を書き、勤工儉學の意義、ひきつづき青年に勤工儉學をよびかける必要性、國內での準備を萬全にして留學後の困難を軽減する方法などを述べた後、とくに先遣隊を派遣してフランスでの下地仕事をすすめる必要があることを力説した。⁽²⁹⁾この提案に中佛教育會は完全に同意し、湖南學生の一人であった蕭瑜を中佛教育會の書記に採用して、一九一九年はじめ、李煜瀛とともにフランスへ先發させた。⁽³⁰⁾新民學會會員でもあった蕭瑜のフランスだよりが、次々に毛澤東らのもとにとどき、フランスへの道がいよいよ近く感じられるようになった。

フランス勤工儉學運動は、國內での準備活動そのものが、青年たちに自主、獨立の進取的な精神をうえつけ、労働を尊び労働者に學ぶ絶好の機會を與えた。長辛店の京漢鐵道工場に附設された預備クラスでは、午前中、工場の現場で労働者の中にはいつて、生産過程のあらゆる工程を労働者から直接學び、午後はフランス語をはじめ、機械、幾何、三角法、代數等の授業をうけ、夜は夜で自習にはげむという日課であった。折から、李大釗らの言論が、青年たちの心をとらえていた頃であり、そのような時代思潮とあいまって、はじめて肉體労働に参加した知識青年は、労働の喜びに目ざめ、労働者との結びつきをつよめていった。何長工は、長辛店での半工半讀生活を總括して、「この期間にわれわれは、もつとも基本的な生産の技術をマスタ

「ただでなく、物の考え方や気持ちもしだいに労働者にちかづき、働くことの素晴らしさを感じるとともに、ブラブラ遊んでいることを嫌悪するようになった」⁽³¹⁾と述べている。

もちろん、この段階の知識青年の労働観は、いままでまったく労働に近づいたことのない知識青年が、はじめて労働に汗を流し、感性的に労働のもつ意義に覺醒しはじめた段階でのそれであったといえる。だが、實踐を通じてえた感性認識は、やがて理性認識に發展する可能性をひめていた。『新青年』がマルクス主義研究の特集をくんだのをはじめ、一九一九年の四月から五月にかけて、『每周評論』が『共產黨宣言』の一部を翻譯し、『晨報副刊』がマルクス研究の特別欄を設けるなど、マルクス主義の紹介がさかんになされたことは、その傾向を助長する役割をはたした。長辛店でも、學生たちは食費をぎりつめてでも、これらの雑誌、新聞の購讀にまわし、「新思想」の吸収におおわらわであった。⁽³²⁾一九一九年五月にはすでに、『共產黨宣言』ばかりでなく、『賃労働と資本』も雑誌に翻譯されていた。これらを通じて、階級闘争と資本主義的生産關係を學びとり、預備クラスを終えてフランスに出發する頃には、初歩的なマルクス主義の知識を身につけるのもでてきたようである。

一九二〇年一月にモンタルジに行った蔡和森は、まもなく毛澤東によせた書簡で、階級闘争についてかれの意見を述べた。「社會主義は資本主義の反映です。その重要な使命は、資本主義の經濟制度を打破することにあります」、「階級闘争の結果は、必ず階級獨裁になります。獨裁でなければ、社會を改造し、革命をまもることができません」、あるいは「わたしは、世界ははっきりと二つの敵對する階級の世界に分かれており、學説もはっきりと二分されているとおもいます」⁽³³⁾。この斷片からでも、蔡和森がフランスに着いた前後にすでに階級闘争の觀點とプロレタリア獨裁の理論を、初歩的に身につけていたことを窺える。しかし、中國國內における思想界の狀況と同じように、フランス勤工儉學生においても、その多くがマルクス主義にはしるまでには、まだかなりの時間を必要とした。蔡和森の例は、この段階では、まったくの少數派に屬するのであり、多くの勤工儉學生は、何長工の例にみられるように労働の實踐によって、おぼろげながら、社會主義思想一般への興味をいだきはじめていた程度であつただろう。

青年たちに思想的、政治的訓練の機会を提供したのは、預備クラスにかぎったことではなかった。渡佛旅費を調達する問題でも、青年たちは、中國のおかれてゐる現状を、身を以て思いしらされることになる。湖南の青年たちがひとまず預備クラスに落着いた後も、旅費問題は容易に解決されなかった。當時フランスまで三等船客でも四百元を必要とした。その金額は、貧しい學生にとってほとんど天文學的な數字であつた。毛澤東、蔡和森らは、黒龍江、吉林あるいは新疆のあたりに出稼ぎして財團をつくる案や、東南アジアへ行つて、勞働者なり教師なりになつて資金をつくる案などを検討したが、いずれも實行にうつせず、けつきよく北京政府または各省政府から補助金を出させる方針で、關係當局との交渉に奔走した。

この資金問題では、李煜瀛がかれ一流の方法で、青年たちのつきあげをかわして、政治的な財産をまそうとした。本來、李煜瀛らのアナキストグループにとつて、官僚となることは嚴禁されていたが、軍閥、政客との結びつきまで否定されてはいなかつた。むしろ自分たちの政治的影響力をますためには、軍閥、政客をも利用することが望ましいこととみなされ、資金問題を解決するうえで、李煜瀛は、かつて參戰華工の募集をめぐつてわたりあつた梁士詒にもとりいれる覺悟があつた。李煜瀛のやり方は、例によつて、内實のないありとあらゆる協會をつくつて、世間の注目をあびる手であつた。中佛教育會のさらに上部機關として組織されたものに、中佛學務聯合會とよばれる團體があつたが、李煜瀛はさらにこれを母體として、中佛協進會なる組織を結成した。第一次世界大戰の勃發以來、華工の大量渡佛をはじめ、親密さをましてきた中佛の經濟、教育關係をさらに増進しようというのが、その趣旨であつた。もちろん、その主眼が寄附金集めにあつたことはいうまでもない。

一九一八年十月二十日、中佛協進會は北京の江西會館に、一千人以上の參會者をあつめて盛大に開會式を舉行した。來賓には、フランス公使ボッペ(Boppe)、留佛儉學會教師ドルモン、教育總長傅增湘、河工督辦熊希齡、外交總長陸徵祥代理、前交通部次長葉恭綽代理、前財政總長梁士詒、僑工局長張岱彬らが招かれた。來賓および代理が、次々に演壇にたち、中佛親善の意義を説いた。中でも注目されるのは、梁士詒と張岱彬が在佛華工の教育事業の發展に力點をおいて演説したことである。各來賓の演説に續ぎ、蔡元培が閉幕の詞を述べたが、特に寄附金にふれ、張岱彬が百元、李長泰(歩軍統領)が一千元、伍廷芳、

岑春煊、汪精衛、吳玉章が一萬フランを協進會に寄附したことを報告した⁽³⁵⁾。各界の名士を集めた開會式のあと、會場を北京大學に移し、一週間にわたる専門別討論會が催されたと伝えられるが、その詳細はあきらかにしない。

この大きなセレモニーを成功させた李煜瀛の算段では、これ以後、政界財界から多額の援助をおおぐことができるはずであった。とりわけ、參戰華工の教育を大義名分に、僑工局に期待がかけられた。僑工局としても、海外の華工を管理する責任上、大量の教員を海外に派遣する必要があったが、その財政的餘裕がなく、「もつとも簡単な方法は學生に若干の旅費を貸與することである⁽³⁶⁾」と考えているにちがいないと、李煜瀛はふんだのである。しかし、僑工局の貸與は、ごく一部の學生に與えられただけであり、しかも、後に「僑工局に意外の問題が発生」したために中止になってしまい、各省の學生は出身各省の政府に、もつと大幅な貸與を要求しなければならなかった⁽³⁷⁾。湖南の場合でいえば、河工督辦熊希齡がにぎっていた米鹽公金の元利一千萬兩餘りから、湖南省學生への旅費貸與がなされるように、李煜瀛はとりはからったのである。このように、各種の機會をみつけては、政、財界とのコネをつくり、後は學生に紹介狀を書いてやって、直接交渉に行かせるのが、李煜瀛のやり方であった。

しかし、「これら『熱心なる人士』は紹介狀をかいてくれることはできても、ちょっと煩わしいことにぶつかると、尻込みしてしまい、誰もうらみを買うような矢面に立とうとはしない」といわれるように、李煜瀛も最後まで責任をもちはしなかった。糸口をつけてやった後は、もう李煜瀛のあずかり知らぬところで、學生たちは政、財界の海千山千と、虚々實々の交渉にあたらなければならなかった。湖南の學生たちに貸與の約束をしていた熊希齡は、いざ給與の段になると、言を左右にして容易に學生たちの要求に應じなかった。約束の段階では、例の米鹽公金をめぐって、當時の湖南督軍張敬堯と文書合戦でその管理權を争っていたため、熊希齡は、「湖南の人のために福祉をやる」という大義名分をかかげて、強引にそれを獲得する材料に、留學資金貸與を利用したのであった。しかし、その結着がつくと、とたんに貸與すら惜しくなってしまうというわけである。さきの約束をたてに、學生たちは「國家のために人材を養成する」理を説いて、執拗に交附をせまったが、「古狸」は

頑として首をたてにふらなかつたという。⁽³⁸⁾ 結局、このやりとりは、一年半も長びき、一九二〇年四月に至って、漸やく學生四十人に四百元ずつを貸與することになり、學生たちのねばり勝ちに終った。⁽³⁹⁾

その間に、湖南の華容縣當局に交渉にでかけた學生代表が、縣長をのしつたために拘禁されるという事件までおこり、「軍閥統治下の縣當局は、土地の土豪劣紳の手にかんぜんに握られ、進歩的學生に利益をもたらすような事業にたいして、どんなに破壊してもまだ足りぬと思っているのに、なんで金を出して援助することなどあろうか⁽⁴⁰⁾」という體驗的な結論を、學生たちは下したのである。

時代閉塞の現狀を打破するために、新思想を求めて青年たちはフランスをめざした。青年たちの行動力は、預備學校、旅費問題などの障害を次々に克服して、目的に歩一歩近づいていった。遅々として進まなかつた提唱者たちの活動も、青年たちのつき上げをまつて、はじめて進展をみせはじめたのである。提唱者と學生たちの間には、動機の點でも方法の點でも、潜在的に對立の要素がはらまれていたが、運動の勃興期にあつてはまだ表面化するには至らず、吳越同舟よろしく、各自の方法で、運動をよりあげていった。しかも、フランスでは、第一次世界大戰の終結にともない、經濟復興をすすめるため、中國人學生のアルバイト留學を大いに歡迎する空氣がたかまつていたのである。

三、五四運動の衝擊

留佛勤工儉學生の第一陣は、實質的には、一九一九年三月十七日、日本郵般の因幡丸で上海をたつた八十九名である。かれらは二ヶ月近くの航海をへて、五月十日にマルセイユに到着した。⁽⁴¹⁾ 續いて、三月三十一日、二十六名が、日本郵般の賀茂丸で上海をたち、五月十八日にマルセイユに着いた。⁽⁴²⁾ 第一陣の構成は明らかでないが、第二陣の構成は、保定育德中學の預備クラス、十二人、保定布里村の預備クラス、五人、西什庫の預備クラス、三人、北京大學の預備クラス、二人、佛文繙譯學校、湖南工業專門學校、南開中學各一人となっている。保定育德中學の預備クラスは、何長工の回憶でも、フランス語の水準が非常

に高いクラスであつたようで、優先的に多く選ばれたものと思われる。また出身別では、直隸、十五人、湖南、十人、江蘇、一人である。⁽⁴³⁾直隸は地の利をえていたので多數をしめたのであろうが、湖南の十人は、やはり毛澤東、蔡和森らがまっ先に、積極的に努力した結果であらう。

上海の大新聞『時報』には、歡送會の模様から埠頭での見送り風景まで、逐一報道された。上海に集合した出國學生の世話、靜安寺路にあつた寰球中國學生會⁽⁴⁴⁾がひきうけることになった。中佛教育會および留佛儉學會の主催する歡送會が、寰球中國學生會やフランス工部局市政廳などの會場を借りて開かれ、中佛兩國の來賓が列席した。フランス總領事以下、三人の副領事、工部局關係者などが、フランス側を代表して、壯行の辭を述べた。中國側からは、中佛教育會の高魯、留佛儉學會の洪誠、寰球中國學生會の朱少屏らが次々にたち、「法蘭西^{フランス}の文明、世界第一となす。諸君、旅佛の後、學業の外に更に宜しく彼邦文化の精神に注意すべし。他日、歸國すれば、以て國人に供獻すべきに庶らん」と、あいかわらずフランス文明の贊美を、異口同音にくりかえした。演説のあと、乾杯をかわしながら、中佛雙方から「中華民國萬歲！」「フランス萬歲！」を歡呼し、最後に記念撮影をして散會した。⁽⁴⁵⁾埠頭での見送りも盛大なもので、名士多數がかけつけ、祖國を忘れないように國旗の徽章、旅中のなぐさめに教育書籍、小説、雜誌などが、學生一人一人に贈られたという。『時報』は、フランス勤工儉學の目的が、「わが國の工業勢力を海外に發展せしむるにあり」とくりかえし述べ、工業發展のための技術教育にもっとも期待がかけられていた當時の雰囲気を傳えている。

こうして、フランス勤工儉學生の出國は、順調なすべりだしをみせ、以後續々と勤工儉學生のグループが、上海を旅立つ豫定がくまれていた。しかし、五月四日の北京での學生デモに端を發する五四運動が、全國の都市を席捲するにおよび、出國は一時中止のやむなきにいたつた。五四運動はたんに出國の延期をもたしただけではなく、勤工儉學運動が政治的にも思想的にもいっそう深化する機會ともなつた。預備クラスで留學準備にはげんでいた學生たちが、五四運動に参加して大いに政治的な覺醒を促されたという意味ばかりではなく、五四運動を主體的に闘つた青年たちの中から、フランス勤工儉學運動に自己の

發展の新たな方向を見だし、明確な思想的目的をいだいて参加するものもでてきたというわけである。いずれにしても、反帝反封建の偉大な闘争を経験した青年たちは、莫然とした「新思想」ではなく、明確に「救國の新思想」を求めて、フランスの地をめざすことになったのである。

ほかの預備クラスでの五四運動の状況については、われわれはほとんど見るべき資料をもたない。長辛店の京漢鐵道工場預備クラスのみ、何長工の回憶と、傍證としての工場労働者の回想がのこされているので、これを手がかりに五四運動における勤工儉學生の動向の一斑をさぐることにしよう。

北京郊外、南四十數キロに位置する長辛店は、京漢鐵道の車輛修理工場を中心に發達した工業の町であつた。北京周邊では、近代工業労働者の集中する、ほとんど唯一の町であつたため、五四以後、鄧中夏、張國燾など北京の先進的な學生が労働者の組織化に全力をあげ、北方での近代的労働運動の發祥地となつた。その労働運動の、いわば土壌をつくつたのが、五四運動における労働者と學生の連帶した闘いであつた。

五月四日に先立つ數日間、北京大學の學生が、ひんばんに長辛店を訪ずれた。北京軍閥政府がパリ講和會議で、ドイツ山東權益の回收と二十一條要求の撤廢という中國の要求をまったく無視した屈辱的な條約に、調印しようとしているというニュースをたずさえてきたかれらは、留佛預備クラスや技工養成所の學生に決起をよびかけていた。五月七日の國恥記念日に豫定されていた反對デモが、五月三日夜の北京法科大學大禮堂における臨時集會で急遽、四日にくりあげられたことを知ると、長辛店の學生たちは、汽車ではデモに間にあわないと思ひ、ロバをしたてて天安門にはせ參じた。⁽⁴⁶⁾ この日、天安門には、北京大學、高等師範をはじめ十數校の學生が、手に手に「二十一條條を取消せ!」「わが青島を還せ!」「賣國賊曹汝霖、陸宗輿、章宗祥を誅せよ!」などと書いた旗をもつて結集した。中には、フランス語や英語で書かれた旗もあったというが、フランス語のは、あるいは預備クラスの學生たちのものであつたかもしれない。集會のあと、東交民巷の公使館街に向つたデモ隊は、巡捕に進入を阻止され、自國の土地すら自由に歩けない憤りに、賣國賊への怒りをつのらせ、大學、趙家樓の曹汝霖邸におし

よせた。數人の勇敢な學生が窓をやぶつて邸内に侵入し、内側から門を開くと、群衆はなだれをうっておしり、逃げおくれた章宗祥に鐵拳をくだし、火を放った。⁽⁴⁸⁾「趙家樓の炎上」は、全國に抗日救國の炎をもえあがらせ、ここに二ヶ月に及ぶ五四運動の火ぶたがきつておとされた。

三十二人の逮捕者をだしたこの日のデモから疲れはててかえつてきた預備クラスの學生たちは、翌日から工場や停車場にかけては、労働者や旅客たちに、逮捕者の釋放を訴え、賣國政府の講和條約に反對するよう、演説してまわった。學生たちの實力行動に、労働者は共鳴し、つよく支持した。しかし、鐵道工場の中國人工場長であつた劉家驥は、曹汝霖の娘むこで、學生たちの愛國運動に、露骨な干渉をくわえた。怒つた學生たちは、労働者とともに、石油かんをかついて劉家驥の家におしかけ、「趙家樓の炎上」を再現した。⁽⁴⁹⁾これを機に労働者の意氣はいやがうえにもあがり、かれらの隊列が愛國運動にふみだしはじめた。北京大學からは引きつづき、王光祈、賈祝年らが長辛店におもむき、預備クラスの學生と聯絡をとりながら、労働者のオルグをすすめた。また、鬭争の經驗から特に労働者を重視していた天津學生聯合會は、この工場に勤めている父をもつ、南開中學の郭維海という青年を派遣し、労働者への浸透をはかつていた。⁽⁵⁰⁾

六三運動において、ついに上海、天津などの労働者がたちあがつたのに呼應して、長辛店の労働者も、全面的な抗日愛國運動に決起した。預備クラス、乗務員養成所、技工養成所の學生たちと、労働者との連帶のもとに、「各界救國聯合會」が成立し、末端組織として「救國十人團」が結成された。長辛店だけでも、五百人以上の労働者が「救國十人團」に参加したという。労働者と學生の活動は多彩であつた。一日中、長辛店の町をねり歩いて、「賣國奴をやっつけろ！」「青島をとりかえせ！」と聲をかぎりに叫び、夜は夜で三日にあげず、ちようちんデモがくりかえされた。十人團團員は、商店や列車を檢査しては、「日光石鹼」「ライオン齒磨」などの日本製品をみつつけ次第、かたっぱしから焼きすて、數日ならずして長辛店の町から日本製品は姿を消した。町かどで、工場でまた停車場で、十人團の講演團が、朝鮮やインドを例にあげて、悲痛な亡國の危機を訴え續けた。日曜日になると、「長辛店救國宣傳隊」とかいた旗をおしたてて、救國十人團が小井、大井、琉璃河などの近郊農

村にでかけ、手辨當の窩頭^{ワウト}をかじりながら數十里（一里は約〇・五キロ）をかけめぐり、國產品の愛用を宣傳しては「無敵じるし」の齒磨粉を賣りあるいた。長辛店各界救國聯合會の謄寫版新聞は、各地でくりひろげられている愛國運動の消息を傳えた。⁽⁵¹⁾

大都市の勞働者、店員が、學生を支援して愛國運動の前面に登場するにいたって、北京軍閥政府も、武力彈壓という強硬策だけで民衆の怒りをおさえることが不可能なことを覺り、六月十日には曹汝霖、陸宗輿、章宗祥の罷免、六月二十八日には講和條約調印拒否を決定した。こうして、勞働者がはじめて政治舞臺におどりでたことによって、軍閥政府は妥協を餘儀なくされ、五四運動は一定の成果をあげ、一應の收束にむかった。勞働者とともに闘った預備クラスの學生たちは、勞働者階級の力量に目をみはった。「五四運動は、われわれのような、初歩的な共產主義思想の芽をもったインテリゲンチヤに、いきいきとした階級教育をほどこした。五四運動は、六月三日のいわゆる六三以後、勞働者階級の參加によって、運動のいきおいと、力が、面目を一新するほど大きなものになった。これは反動勢力をして、妥協と屈服を餘儀なくさせた。このことは、中國革命史のうえに新しい課題をもちだした。つまり、革命の主力は誰か——という問題である。……われわれは、勞働者階級との共同の生活、共同のたたかいの中で、しっかりとひとつに結びついて、勞働者階級の力と知恵とを身をもって感じとっていた。もしも勞働者階級にたよらなかつたならば、われわれは長辛店で、五四前後の革命運動にどんな勝利もかちとることはできなかつたはずであつた」。⁽⁵²⁾

長辛店で愛國鬭争をたたかった救國十人團の勞働者は、やがて鄧中夏、張國燾の指導のもとで勞働組合を結成する中核分子となり、一九二三年の「二七慘案」までの第一期勞働運動高揚期を醸成していったのである。預備クラスの學生たちも、二月におよぶ鬭争の生活に區切りをつけ、再び留學準備の勉學にもどった。勞働者とともにたたかった日々の経験は、かれらにフランス留學の目的をいっそう鮮明におしえてくれた。それは、學位をもらうためでもなければ、技術だけを修得するためでもなく、まさしく祖國の勞働者とともに闘う救國の思想を求めるためであつた。一年たらずの預備クラスを終えて、長辛店の町を去るとき、かれらは、ともに闘い、手とり足とり仕事のこつを教えてくれた勞働者に車窓から別れを惜しみながら、ひそ

かに誓った。「師匠^{おやじ}さんたち！われわれは、けっしてあなたがたの期待にそむきません。きっと祖國のために出路をさがします。そうしてはじめて、あなた方にあわせる顔があるのです」⁽⁵³⁾。

長辛店での情形を普遍化することは許されないかもしれない。長辛店におけるほど、労働者との親密な連帯は、おそらくほかの預備クラスには見られなかったであろう。しかし、北京大學の預備クラスにしても、保定育徳中學の預備クラスにしても、またそれ以外の預備クラス、例えば北京佛文專修館にしても、五四運動の波にまきこまれたことはあきらかであり、六三運動の威力をまのあたりにして、程度の差こそあれ、労働者階級への刮目をせまられたことも、十分推測できる。まちがいはなく、五四運動と六三運動の衝撃は、それ以前の莫然たる「勞工神聖」といった觀念ではなく、明確に階級としての労働者の存在を實感させたのである。この實感を、勤工儉學生それぞれがどのように論理化してフランス留學の目的に結びつけていったかは、なお後の問題としなければならないが、少くとも長辛店のような例もあったのである。

一方、五四運動はまた、全國の青年學生に深刻な覺醒をうながしていた。半封建半植民地の中國社會の根本的な改造を窮極の課題とするかれらは、賣國賊の罷免と講和條約調印拒否に満足してはいなかった。北京、上海、天津、武漢、長沙など中國の到るところで、青年たちは、五四運動の經驗を總括して、窮極の目的を達成する手がかりを、摸索しつづけていた。それは、工讀互助運動であり、平民教育運動であり、張敬堯驅逐運動であり、また労働運動であった。その表現形態はさまざまであったが、五四運動の闘士が眞の救國思想を探究する途上でこころみた試行錯誤であるという點では、すべて一致していた。そして、フランス勤工儉學運動も、これらの救國運動の一形態として、五四運動で鍛えられた青年たちに、ひとつの實踐の方向を示すものとなったのである。

工讀互助運動を提唱した王光祈や少年中國學會のメンバー、北京高等師範附屬中學で少年學會を組織した趙世炎、四川で五四運動をたたかった聶榮臻、陳毅、鄧小平、また周恩來の指導のもとにもっとも苦しい闘いを貫徹した天津覺悟社のメンバー、六三運動を指導して解雇された上海求新工場の労働者吳琢之⁽⁵⁴⁾、等々、五四運動の闘士が、次々とフランス勤工儉學運動に新し

く参加するようになった。あるものは、救國の新思想を求めて、あるものは、ヨーロッパの勞働運動を學ぶために、またあるものは、自らの「工學主義」をフランスの地において實踐するためにであった。さらに、ロシアに赴いて、マルクス・レーニン主義を學ぶことを第一目標にしながらも、そのルートがえられず、次善の策としてロシアに近いフランスの地を選んだものもいた。⁽⁵⁵⁾

また、五四運動は中國婦人解放運動史のうえでも重要な意義をもつことは周知の事實であるが、湖南をはじめ、浙江、江蘇などで、先進的な女性が、フランス勤工儉學運動に参加したことも、その一ページを飾るにふさわしい出來事であった。湖南では、向警予、蔡暢らが、一九一九年十二月に長沙の周南女學校で、湖南女子留佛勤工儉學會を組織した。それは、男子學生と同様の留學目的を掲げるとともに、「男女の教育は平等でなければならぬ」という信念を實行にうつす行動でもあった。新民學會會員でもあった彼女たちは、毛澤東、蔡和森らの協力をえて、周南女學校ばかりでなく、稻田、涵德、崇實、淑旦の各女學校にもよびかけ、参加を求めた。その組織は、幹事四人からなる幹事部と評議部にわかれ、周南女學校とパリの豆腐公司にそれぞれ會所を設けることになっていた。⁽⁵⁷⁾

湖南女子留佛勤工儉學會の簡章が『湖南歴史資料』（一九五九年第四期）に收録されている。留佛勤工儉學會自體の規約書をわれわれは知らないので、當時の規約書の一例として一瞥しておく價值があるだろう。

第一章 總 綱

第一條 本會は湖南女子留佛勤工儉學會と命名する。

第二條 本會はフランスに赴いて勤工儉學し、歸國したあかつきに、實業教育を振興することを目的とする。

第三條 本會の奉ずる信條は、工讀神聖である。

第二章 工 讀

第四條 本會は肉體勞働と頭腦勞働の兼行を認める。

第五條 本會會員は、いつでもどこでも、二人以上を組合せ、交互に工讀しなければならない。

第六條 本會會員は、各組がたがい一回以上の讀書報告をしなければならない。

第七條 本會會員は、隨時、女子に關する問題を提出して相互に研究し、その結論を本會同人の主張とし、本會がこれを印刷、發行しなければならない。⁽⁵⁸⁾

この簡章は、實業教育の振興と工讀主義の普及を二つながら主張している點で注目される。當時のフランス勤工儉學運動が、實業教育の振興というブルジョア的な要請から、工讀主義というアナキズム的な主張まで、幅広い傾向をもちこんで、しかもそれが矛盾として感じられずに、むしろ運動の有機的な要素として一つにおさまっていた状況の一端を、この簡章は示しているように思われる。發足もない湖南女子留佛勤工儉學會は、この年十二月二十五日、向警予、蔡暢、蔡萬健豪（蔡兄妹の母）、李志新、熊季光、蕭淑良の六人を送りだした。その日、上海の埠頭には、天津の婦人運動家劉清揚もかけつけ、この婦人運動における壯舉を祝ったのである。⁽⁵⁹⁾

こうして、五四運動は、預備クラスの學生に新たな留學の意義を自覺させるとともに、多くの先進的な青年男女の眼をフランス留學に向けさせ、フランス勤工儉學運動に清新な息吹をふきこんだのである。さて話はもどるが、第二陣以來途絶えていた出國も、五四の衝撃から二ヶ月をへた七月十三日、京津留佛儉學會六十餘人の上海出航を以て再開された。しかし、偉大な反日運動をたたかった青年たちは、もはや留學のためとはいえ、日本資本の船に乗船することを認めはしなかった。京津留佛儉學會の學生は、五四以前から豫定されていたので、やむなく日本郵船の三島丸に搭じたが、同時に出發する豫定であった四川留佛勤工儉學會の學生六十一人は、三島丸乗船を斷固として拒否し、一ヶ月にわたって南洋公學などに假寓して、他の便船をまつた。⁽⁶⁰⁾ かれらは、フランス總領事の斡旋でフランスの船會社と折衝し、結局「四等船客」として、普通の三等船客より三百元も安いわずか百元で、フランスまで運んでもらうことになった。⁽⁶¹⁾ これ以後、この方式は定着し、フランス勤工儉學生はすべてフランス船の四等船客として送られた。反日の初志を貫徹いて、四川の學生たちは八月十三日、フランス船メナム號で待

望の出國をはたした。この事件にも、五四運動における日貨ボイコットの様相の一面をうかがえると同時に、それが反日本帝國主義にとどまり、いまだ帝國主義一般に對する反對にまで深化していなかった五四の限界を知ることができる。

再開されたフランス勤工儉學運動に、湖南と四川を筆頭に、廣東、江西、直隸、福建、浙江、江蘇、安徽、湖北の各地から青年學生の應募が殺到した。その殺到ぶりは、この年末に八百人が出國待ちする狀況が現出し、一説に今後二年間に、六千人に及ぶ學生がフランスへわたることになるだろう、といわれるほどであった。⁽⁶²⁾豫想をこえた盛況をまえに、提唱者である中佛教育會としても、それに應じた組織の再編成をせまられた。從來のように、名士がたまに會合を開いて方針を定め、仲介の勞をとるだけで、あとは學生の自力更生にまかせるというシステムでは、とてもこの多數の應募者をさばききれものではなかった。預備クラスへの入學からフランスへの出發まで、一切の手續を組織的に推行する恒常的な機關が必要であった。ことに、フランスへの出口になる、上海支部と廣東支部の充實がのぞまれたのである。

上海支部では、會長に張繼、副會長にフランス領事ウィルダン（魏武達 M. Wilden）をすえ、そのもとに評議員、會計、幹事をおく組織をととのえ、會所をフランス租界霞飛路^{ジョッフル}二四七號に設立した。⁽⁶³⁾恒常的な組織作りが一段落したあと七月には、二洋涇橋の「全安棧」という旅館に、留佛學生専用の宿泊所を設けて、それまで分散して宿泊していたためにとかく支障をきたしていた上海滯在中の連絡事務がスムーズにいくようにした。⁽⁶⁴⁾また出國待ちの學生の無聊をなぐさめる目的から、會所近くの尙賢堂にクラブを設ける計畫もたてた。このクラブには、「各種の身體に有益な遊戲」ばかりでなく、圖書室も設置し、「國民の愛國心を喚起し、國民の新思想を増長する」ような書籍を閱覽に供することになっていた。⁽⁶⁵⁾これらの事業のために、各界への寄附依頼も熱心に行われた。⁽⁶⁶⁾

九月にはいと、長辛店のような工業預備クラスが北方に偏在していた從來の狀況を改めるべく、上海にも工業預備クラスが設立されることになった。提唱者側の實業振興という觀點からすれば、工業預備クラスは最優先の課題であつたはずであるが、上海は、中國でもっとも工業化がすすんでいた地區であるという立地條件のよさにもかかわらず、この方面の取組みがた

ちおくられていた。そのたちおくれを早急に克服する便法として、上海支部では、既存の職業學校との提携という、初めてのケースが試みられた。提携相手に選ばれたのは、一九一七年に黃炎培らによって設立された中華職業教育社であった。教育による「生計問題」の解決を標榜していた中華職業教育社は、一九一八年に、鐵工科と木工科とからなる上海中華職業學校を創立し、附屬工場での實習を加えた独自の教育方法でエンジニアの育成につとめ、折から勃興しつつあった上海の民族ブルジョアジーのつよい支持をえていた。この中華職業學校の施設を利用して、留佛學生に工業の實習教育をほどこそうという構想のもとに、上海工業預備クラスが設けられたわけである。留佛勤工儉學會と中華職業教育社とは、留學教育と國內教育という差異はあるものの、實業振興の人材を育成するという點では、目的を共通にしていた。工業預備クラスの開設「通告」で、まっさきに「この時、國內まさに全力で國貨製造を提唱し、應用工藝の人才を相需めること、更に亟かなり」⁽⁶⁷⁾と、その設立趣旨をうたっているのも、五四運動をさかいにいっそう高まってきた民族ブルジョアジーの要求にそつて、この二つの團體が提携した事情をよく反映している。

一方、廣東支部でも、留佛勤工儉學運動を促進するため、中佛兩國各三人からなる理事會を設けて陣容をととのえ、十月には、兩國人士多數の參加をえて討論をすすめた。その結果、廣東フランス領事館内の不崇書院舊址に、遊學預備科館を設立することが決定された。また、特に留學經費の問題についても論議され、「佛國の村郷學校を以て最廉となす。每人、年にただ三、四百金のみ」⁽⁶⁸⁾という理由から、廣東支部では、フランスの農村學校に多くの留學生を派遣するのが、もっとも得策であろうという結論に達していた。

中佛教育會の國內機關の充實にともない、留學生の出國も急ピッチになった。その後の出國狀況は、八月二十五日に五十名、九月二十九日に四十數名、十月三十一日に百五十名、そして十二月には二回、二百八名と續ぎ、結局一九一九年だけで、七百名前後が、上海をたつていった。⁽⁷⁰⁾ もっとも、この中には留佛儉學生も含まれていたもようである。その割合は約三分の一とみこまれるから、留佛勤工儉學生の數は四百數十名であろうと推測される。このフランスへの行進は、一九二〇年にはいると一段と

敷をまし、一月十五日出發の第十次⁽⁷²⁾から、十一月十五日出發の第十七次⁽⁷³⁾まで、約千二百人の勤工儉學生が出國し、中佛教育會が一九二二年一月に出國停止命令をだすまでに、合計約千六百の多きを數える學生が海をわたったのである。

かくして、フランス勤工儉學運動は、五四運動の波にもまれることによって、著しい發展をとげることができたのである。しかし、すでにみてきたように、その發展は、決して單純に、中佛教育會の提唱者たちが意圖した方向の延長線上になされたものではなかった。フランス革命の榮光を忘れられない提唱者たちと、ロシア革命に觸發された五四の青年たちとの、うめることのできない世界觀のへだたりは、フランスでの勤工儉學生活という實踐の場で、やがてぬきさしならぬ局面にたちいたるであらう。五四の衝擊は、フランス勤工儉學運動になう人々の間に、底しれない龜裂を生じさせたのちに、はじめて歴史のサイクルを終えるべきものであった。

注

(1) 陶英惠『蔡元培年譜』上 四六八頁。

(2) 蔡元培「蔡子民先生在上海愛國女學校之演說」——『東方雜誌』第十四卷第一號（民國六年一月十五日）所收。「至民國成立、改革之目的已達、如病已醫愈。不再有死亡之憂、則欲副愛國之名稱、其精神不在提倡革命、而在養成完全之人格」。

(3) 「我之歐戰觀」——『蔡子民先生言行錄』所收。「使戰爭結果、同盟方面果占勝利、則必以德國爲歐洲盟主、亦即爲世界盟主、且將以軍國主義支配全世界。又使協約方面而勝利、則必主張人道主義而消滅軍國主義、使世界永久和平」。

以上、陶英惠 前掲書參照。

(4) 「北京留法儉學會預備學校」——『東方雜誌』第十四卷第六號（民國六年六月十五日）所收。「民國六年、華林君自法歸、抱擴充儉學會之志願。適值馬景融君創設民國大會于京都、遂由華馬二君與蔡公時夏雷白玉鱗江季子時明符劉鼎生羅偉章諸君、重組北京留法儉學會預備學校」。

「留法儉學會緣起及會約」——『東方雜誌』第十四卷第四號（民國六年四月十五日）所收の發起人一覽では、右記のほかに吳敬恆、蔡元培、張繼、李煜瀛、劉厚、蔡無忌、法露の名が舉げられている。

また、民國大學については、『全國文化機關一覽』民國二十三年版 臺北中國出版社 民國六十二年復刻 二五二頁、民國學院の條に次のような記事がみえる。「〔地址〕北平宣武門內太平湖。〔沿革〕本校原名民國大學、係民國五年冬、由蔡公時、馬景融等以私人財力創辦。六年四月正式成立。二十年改稱民國學院」。

(5) 「北京留法儉學會預備學校」。「此種問題、前于發起儉學會時、固已言及。然仍多出于理想。既經有儉學會百餘人之經驗、尤爲確實」。

(6) 以上、「留法儉學會講演會之演說」——『東方雜誌』第十四卷第九號（民國六年九月十五日）所收。なお、『蔡元培先生全集』臺灣商務印書館 民國五十七年刊では、この講演會を「民國六年八月」のこととしている。

(7) 「留法勤工儉學會一覽」——『教育公報』第四卷第十三號（民國六年十月）所收。「近由蠡縣段子均段秉魯段萬慶段憲武馬如林、高陽李石

(8)

曾李廣安張秀波齊連登諸君、創設保定各鄉村勤工儉學會預備學校。其他在籌議中者尙多。

附錄。

保定各鄉村勤工儉學會初級預備學校試辦簡章

一宗旨 專爲赴法以工求學之預備。

二學課 以法文爲主科、附以中文及普通知識。各班除平日受課外、並以平日製造工藝品以資實習。

三地址 第一預備學校、保定蠡縣布里村。

四職員 設法文中文教員各一人。

五學生與年齡 至少十八歲至多二十二歲。

六資格 身體強壯、素有職業、尙未成婚、向無煙酒賭博放蕩之嗜好、粗通國文、得有切實保證者、均可報名入校。

七考取之學額 考試之內容、略分兩種。(一)淺近漢文一篇。

(二)知識與志趣之問答。隨考試所得分數之多寡、定先後之次序、前若干名即時入校、後列者俟本校另有位置時或第二年、陸續補傳。

八學期 至少一年。

九學費 每月百文。書紙筆墨等費在外、由學生自附。若有遠來之學生、須備食宿、其費自附。並由本校設法、使其所作工藝品銷流、以得價爲用費之補助。

十畢業後赴法旅費 每人共二百元(詳見經濟支配)。此款學生自備。如其無力自備此款或僅能備一部分者、本校亦可借給、俟其到法後、以工價償還。詳細條件、另定契約。惟願得借款者、須合以下之二條件。(一)確係自己無力出款、亦無法可向親朋借貸者。(二)經本校考驗合格者。每年本校能借給旅費若干分、隨時酌定。

十一義務 學生赴法出發時指導一切、到法後之照料與代覓工作、及助其繼續求學等事、均爲本校與勤工儉學會應負之義務。到法後本校學生、有列名於勤工儉學會及納會費之義務。

(9)

十二增改 如本章有未詳備盡善處、可隨時增訂改良。

同前。「(一)留法勤工儉學會初級預備學校 學期一年、學課爲淺近之中法普通知識與粗淺之工藝。所作之工藝、既爲練習、亦爲補助學費(參觀後列簡章)。(二)留法勤工儉學會高級預備學校 學期二年或三年、學課與中學校程度略同、更加以法文與工藝教育、略似法國工藝實習學校之性質。此種學校、組織較繁、可附屬於他中學或實業學校中(高級校章由各校隨時另訂、其性質亦與初級學校略同、惟程度較深耳)」。

(10)

何長工は、『フランス勤工儉學の回想』とは別の回憶錄、長辛店機關車車輛工場工場史編纂委員會編 島田政雄編譯「長辛店鐵道物語」新日本出版社 一九六三年刊 第一章で、「一九一七年二月吳玉章同志(現中共中央委員)が、ブルジョア階級の學者蔡元培といつしよにフランスから北京にかえつてきて、『勤工儉學會』(アルバイト學生會)を組織し、國內の貧しい學生が、外國に留學できるようにし、それでもって、國をおこす人材を養成しようとしたのであった」と述べている。何にもとづく記述かは明らかでないが、留佛勤工儉學會はフランスの勤工儉學會が、蔡元培、李石曾、李廣安らの手で中國に移植されたものとみるべきであろう。その中で、吳玉章がどのような役割を果たしたかはよくわからないが、おそらく留佛儉學會のときと同じように、四川方面の組織化に盡力したものと思われる。

(11)

周秀鸞『第一次世界大戰時期中國民族工業的發展』上海人民出版社 一九五八年刊 二四〇頁。

(12)

『第一次中國教育年鑑』上海開明書店 民國二十三年刊 丙編一四六頁。

(13)

「旅法華工近狀 錄神州日報」『東方雜誌』第十四卷第四號(民國六年四月十五日)所收。「蓋中國急需工程司及精練之工人。現法國雇用華人、各工廠即爲教練工人最良之所在。……在華人方面、吾人甚喜能效用於聯盟國、並望法國之實業教育、能爲發展我國實業之利

用」。

(14) 何長工 前掲書 一〇三頁。

(15) 同前 三三〇三四頁。

(16) 李大釗「法俄革命之比較觀」『言治』第三冊（民國七年七月一日）原載。いまは、『李大釗選集』北京人民出版社 一九六二年刊 一〇一〇四頁による。

(17) 李大釗「庶民的勝利」『新青年』第五卷第五號（民國七年十一月十五日）原載。いまは、伊藤昭雄譯（西順藏、島田虔次編『清末民初政治評論集』平凡社 一九七一年刊所收）による。

(18) 同前。

(19) 李大釗「青年與農村」『晨報』民國八年二月二十三日原載。いまは、丸山松幸譯（西順藏編『原典中國近代思想史』第四冊 岩波書店 一九七七年刊所收）による。

(20) 丁守和、殷毅彝『從五四啓蒙運動到馬克思主義的傳播』北京三聯書店 一九六三年刊 一七六—一九一頁參照。

(21) 張翼「工學會旨趣書」『工學』第一卷第一號（民國八年十一月二十日）原載。いまは、『北京高師教育叢刊』第一集（民國八年十二月）轉載による。（一）認定人生只有工與學兩件事。（二）認定作工是求學的一個重要的方法、學便要作工、作工便是學。（三）打破勞心勞力的界限、使社會上勞力的工人都去念書—求高深的學問—念書的人都去作勞力的工。（四）破除職業的階級與奴隸的制度、凡是可以自助的能力做得到的、都自己去、不求他人的幫助。（五）提倡應用的操練—工藝的操練—使五官百體的本能和心思同時發達、養成技藝豐富的人。（六）早求生活的獨立與人格的獨立、因而增加社會生利的人」。

(22) 施存統「『工讀互助團』的實驗和教訓」『星期評論』第四十八號（民國九年五月一日）原載。いまは、丁守和、殷毅彝 前掲書 一八六頁引用による。

(23) 李銳『毛澤東同志的初期革命活動』北京中國青年出版社 一九五七年

フランス勤工儉學運動小史（上）

年刊 六四〇七四、八三〇九一頁。

湖南歷史考古研究所現代史編輯「五四」時期湖南新文化運動的部分資料—「五四」時期湖南人民反帝反封建運動報刊紀述輯錄之三」（以後、『報刊紀述輯錄之三』と省略する）『湖南歷史資料』一九五九年第四期（十二月二十五日）所收 七四〇八五頁參照。

(24) 何長工 前掲書 一四〇一五頁。

(25) 「報刊紀述輯錄之三」五一頁。「此萬不可以『人數有限』遏其動機、絕其希望、當另籌一調劑辦法、盡量收容、成一大組織」。

(26) スカラビーノは、前掲書九五頁で、毛澤東の北京到着を「七月十九日」と日附まで明記しているが、毛澤東宛の蔡和森の書簡（報刊紀述輯錄之三）五一〇五五頁）が、八月二十七日附で北京から送られているところから考えると、李銳 前掲書 八五頁の「一九一八年九月間、毛澤東同志和羅學瓚等二十多人動身去北京」という指摘の方が妥當であろう。

(27) 何長工 前掲書 一八〇二〇頁。

(28) 「留法勤工儉學會學生首途」『時報』民國八年三月十八日所載。「蔡子民汪精衛李石曾吳稚暉張溥泉等、於北京創立留法勤學會、成立四載。所辦留法工業預備學校、日益增多、已成立者將近二十餘校、如成都長沙上海北京保定濟南布里斯長春店等處」。

(29) 李銳 前掲書 八五〇八六頁。

(30) Siao Yu Mao Tse-tung and I were beggars. Syracuse U.P. 1959. いまは、高橋正譯『毛澤東の青春』サイマル出版會 一九七六年刊による。同書一八一頁。

(31) 何長工 前掲書 二五頁。

(32) 「長辛店鐵道物語」一七頁。「マルクス・レーニン主義の基礎知識にたいする渴望から、手もとにくらでも錢があると、いそいで新聞、雑誌を買いもめて、うばいあうようにして読み、討論したものであった。われわれが購読した定期刊行物がどんなに多かったかということとは、長辛店郵便局の人が、『あんたのところへの配

達に、ひとり専門に配置しなげなりませんよ」といったことでもわかる。當時、北京や上海などの地から發行されていた進歩的な刊行物、たとえば、「新青年」「湘江評論」「每週評論」「晨報」などは、みなとっていた。

(33) 「報刊紀述輯錄之三」七八頁。「社會主義、爲資本主義的反映。其重要使命、在打破資本主義經濟制度。」「階級戰爭の結果、必爲階級專制。不專政則不能改造社會保護革命。」「我以爲世界顯然分爲兩個敵對階級的世界、學說亦顯然劃分了鴻溝。」

(34) 同前 五四頁。何長工 前掲書 一六〇一七頁。

(35) 「中法協進會大會誌盛」『時報』民國七年十月二十四日所載。「昨日〔十月二十日〕二時、(中法協進會)在江西會館行開會式。到會者一千餘人。茲記其開會之程序及演說大略如左。(一)蔡子民致開會詞。(二)鐸爾孟君致法文開會詞。(三)法公使柏卜君演說、表示歡迎此會稱道頌揚其功用。(四)梁燕孫君演說略謂、向主親法政策、後言及旅法僑工、本其主張之一、賴有此會、更期其教育組織達於完善。(五)教育總長傅阮叔君演說略謂、中法關係近益密切、以後望法文之教育學術普及、並望國內學政界致意、又代表徐大總統致歡迎之詞、並許助聯合會款項與會舍、李石曾君譯爲法語。……(六)僑工局長張岱彬君演說述、僑工到法之結果、及將來僑工教育事業發展種種希望。……(七)蔡子民君致閉會詞、致謝諸會員法公使演說諸君、又謝大總統允助聯合會款項及會舍、來賓與通電助款者仍有三處亦次第致謝、(八)張岱彬君助本會會費一百元、(九)李階平總統領助聯合會經費一千元、(十)伍秩庸岑雲階汪精衛吳玉章諸君、電賀並助款一萬佛郎。(十一)鐸爾孟君致法文閉會詞。同日列席講臺、尙有李統領及京兆尹代表與法國使館諸君及聯合會會員諸君、因時間已晚、未及演說。臨別合撮一影、頗極一時之盛云。」

「中法協進會之盛會」『時報』民國七年十月二十一日所載、「中法協進會之性質談」同十月二十二日所載もあわせ参照。

(36) スカラビーノ 前掲書 九五頁。

(37) 「報刊紀述輯錄之三」五七頁。「其時〔一九一九年〕僑工局允許貸

款、迨後僑工局發生意外問題、以致彼等失望、大家稍寬裕者可自籌款前去、較貧苦者則籌款無從、而彼等去志堅決、粉往上海北京天津等處工作。」

(38) 以上、何長工 前掲書 三六〇三八頁。

(39) 「報刊紀述輯錄之三」五七〇五八頁。「今歲〔一九二〇年〕適李石曾回國、彼時學生正向熊秉三范靜生兩君求援、李君從中維持、熊范慨然允諾、其第一批貸款辦法于下。(一)第一批貸款可派學生四十名、准由現在京津滬三處待款學生領用、俾便早日放洋、免久羈旅次。(二)貸款數目每人各四百元、規定用途如下。(1)留法預備費二百元(盡數換佛郎匯往法國)。(2)赴法船位費一百元。(3)治裝費六十元。(4)雜費四十元。」

(40) 何長工 前掲書 四十頁。

(41) 「留法勤工儉學會學生首途」『時報』民國八年三月十八日所載。

「此次所派、計四川廣東江蘇山東江西湖北湖南直隸等省、有八十九人之多、各帶自修五元到滬。各生已於昨十七日上午十一時、乘因幡丸放洋。こゝで、「實質的には」と言つたのは、これに先立つ同三月に「文字上」三人がフランスに到着してゐたからである(下孝宣輯「留法勤工儉學資料」『近代史資料』一九五五年第二期所收一七六頁)。

(42) 「第二批留法學生出發」『時報』民國八年三月三十一日所載。「勤工儉學會第二批留法學生……茲聞昨日〔三十日〕上午十一時、寰球中國學生會、又邀該生等在靜安寺路五十一號、復開一茶話會。由朱少屏君、詳述出洋應知之事項、並公舉英日法翻譯及庶務等。午後五時、由勤工儉學會幹事彭濟羣、及學生會朱少屏等送至賀茂丸、直至晚九時始返。該船定於今晨八時起碇云。」

なお、マルセイユ到着期日は、いづれも莊啓「留法勤工儉學」『教育雜誌』第十二卷第六號(民國九年六月二十日)所收 八頁の一覽表による。

(43) 「歡送赴法留學生」『時報』民國八年三月二十九日所載の一覽名簿

による。

(44)

寰球中國學生會とは、上海にあった留學幹旋機關である。胡懷琛「上海的學藝團體」『上海市通志館期刊』第二年第三期（民國二十三年十二月）所收 八四七頁に次のような記事がみえる。「寰球中國學生會爲李登輝所發起。該時一九〇五年（清光緒三十一年）、李登輝將再赴美國留學（時李氏已卒業於美國耶魯大學、此爲再次赴美留學）、經過上海、覺得招待留學生出洋、及介紹回國留學生應聘等事、有組織機關的必要、乃發起此會、以圖進行。會所初在靜安寺路派克路口、後一再遷移、至卡德路一九一號。一九一四年（民國三年）後、由朱少屏負責辦理、並附設學校、會務日愈發展、朱氏旋出洋考察、回國後仍主持會務」。

(45)

「歡送留法學生紀事」——『時報』民國八年三月三十日所載。「昨日（二十九日）午後三時、法國駐滬總領事韋爾登君、暨寰球中國學生會、留法儉學會、在法大馬路大自鳴鐘法工部局市政廳、開歡送留法學生會。……先由法總領事、推朱少屏君爲主席。即由朱君致開會詞。次請法總領事韋爾登、副領事韓德威、法工部局董事雷伯利、華法礦務公司魏伍達君等、相繼演說。大致皆謂、諸君出洋之後、雖身履友邦、仍當心懷祖國、幸勿置國事於度外云云。再次爲彭志雲、吳玉章、刁德仁、洪誠諸君、先後致演說詞。略謂、法蘭西之文明爲世界第一、諸君旅法後、於學業外、更宜注意於彼邦文化之精神、他日歸國、庶可以供獻於國人也云云。次共進酒一杯、法總領事歡呼中華民國萬歲、華人方面歡呼法蘭西萬歲以答之。末攝一影而散」。

(46)

何長工 前掲書 二八頁。
長辛店での五四運動については、萍輯「五四運動在長辛店」——『中國青年報』一九六二年五月三日所載という文章もあるが、何長工前掲書の記述をそっくりそのまま用いているだけである。

(47)

北京大學校史資料室輯「五四愛國運動北京資料選錄」——『近代史資料』一九五五年第二期所收 九二頁。「這天下午一時半、十幾個學校的學生齊集天安門。人人手裏拿着一個或兩個白旗、旗上寫着些『誅賣

フランス勤工儉學運動小史（上）

國賊曹汝霖、陸宗輿、章宗祥、『還我青島』……等等、好幾千面沒有同的。也有用英文法文寫的、也有畫很有刺激力量的圖畫的」。

(48)

蔡曉舟、楊景工編「五四」——『近代史資料』一九五五年第二期所收 五〇～五一頁。

(49)

何長工 前掲書 三〇～三一頁。

(50)

『長辛店鐵道物語』三一頁。

(51)

同前 三三～三四頁。

(52)

同前 二二頁。

(53)

同前 二七頁。

(54)

「愛國工人赴法求學」——『時報』民國八年七月九日所載。「吳君琢之、爲滬南求學工廠富有知識熱心愛國之職工。此次上海六五愛國運動、工界加入共同動作者、吳君實負其勞。事後、該廠受外界之迫壓、乃解吳君之職。吳君慨然告人曰、吾因運動同業愛國而失其職業、吾亦無憾、然吾工人此後救國之責任亦愈重、而尤當以新知識建設各種製造之工廠、爲唯一之責任。吳君乃決然赴法求學、約於本月十號起程云」。

(55)

例えば、何長工 前掲書 四五頁で當時上海にあったソビエト行きの出國團體にふれて、「われわれの留佛勤工儉學生のなかからも、いくにんかがそちらにいった。わたしもうちょっとでいきかけた」と述べているように、革命的な青年は、機會があればソビエトロシアに行くことを欲していたのである。

(56)

小野和子「五・四運動期の婦人解放思想」——『思想』一九七三年八月號所收参照。

(57)

「女子留學之發軔」——『時報』民國八年十二月十二日所載。「湘省各女校學生、前曾發起湖南女子留法勤工儉學會。連日以來、籌備已大有頭緒。因於日昨假湖南女校開會成立。除將所擬簡章十八條全體通過外、并照章推舉幹事四人、即日成立評議幹事兩部。其會所決定一設湖南女校、一設巴黎豆腐公司。現時所籌辦者、（一）籌集出發川資、（二）籌集互助基金、（三）籌備組織僑法小學教育及僑工教育、（四）籌備關於

赴法勤工儉學一切事務、刻已將所訂簡章印刷多份、分送全湘各女校查照、俾有志者得隨時加入。

(58)

「報刊紀述輯錄之三」五六、五七頁。「湖南女子留法勤工儉學會、現已在周南女校內成立。昨將所擬簡章分發湘中各女校、用錄各條如下。第一章 總綱 第一條本會定名為湖南女子留法勤工儉學會。第二條本會以赴法勤工儉學、收來回國振興實業教育為目的。第三條本會所奉之信條為工讀神聖。第二章 工讀 第四條本會認定體力工作與腦力工作兼營并進。第五條本會會員隨時隨地組合二人以上交互互讀。第六條本會會員每組須互有一次以上之閱讀報告。第七條本會會員須隨時提出關於女子之問題互相研究、以其結論、作為本會同人之主張、由本會印刷發行之（一九一九年十二月三日湖南「大公報」）。

(59)

「關於留法學生之紀載」『時報』民國八年十二月二十六日所載。「昨日（二十五日）法國郵船公司（央脫來蓬）船、於下午一時在楊樹浦黃浦碼頭啓碇。乘斯船出發之留法勤工儉學生、有三十餘人、均乘四等艙位（艙在船頭下層）。內有湖南女生蔡萬健豪、蔡暢、向警予、李志新、熊季光、蕭淑良六人、係乘三等艙位。赴埠送行者、有聶雲臺君及留法儉學會沈仲俊君、全國各界聯合會劉清揚女士、寰球中國學生會吳敏於君等數十人云。」

(60)

「留法學生明晨出發」『時報』民國八年七月十二日所載。「京津留法儉學會學生六十餘人、定於明晨（十三）八時三十分、由漢口路海關碼頭、乘小輪至吳淞上三島丸。輪船出發、護送員為北京留法儉學會代表齊連登君。該生等本不願乘三島丸、因係以前預定、且此時又別無他船。至四川留法儉學會學生、已請法總領事、預向法公司船訂定艙位。但須俟至八月方可出發。該生等現假寓南洋公學、四川旅蘇學生會。」

(61)

「留法儉學討論會紀事」『時報』民國八年九月二十五日所收、此次のような洪誠の發言がある。「第三屆四川留法學生六十人來滬時、適在抵制日貨風潮最烈中。但除乘日船、并無他船。故均暫住於南洋公學、費用每日每人至少五六角。是以護送員吳幹君、焦急萬分、託余

代為想法有無法國船。同遂至法國郵船公司、商酌四五次、亦未蒙答應。此時吳君之焦急、不可言狀。更有學生為余云、無論船艙之好否、總望余想法、即僅立權之地、亦所情願。後余用盡幾許心機幾許精神、始蒙應許四等艙位百人、並每位均有床褥等物。

(62)

「中國留法學生人數」『時報』民國八年十二月十二日所載。「中國學生二百人、昨晚行抵巴黎、尚有八百人明日將抵。後聞兩年內來法留學者、共有六千人之多。」

(63)

「華法教育會之組織」『時報』民國八年八月九日所載。「上海華法兩國知名之士、援據巴黎北京已成立之華法教育會辦法、爰亦集合同志、發起上海華法教育會。……上海會所則設於法租界霞飛路二百四十七號。其會長為中國前參議院長張繼、副會長為法國領事官魏武達、評議員二人、一為法國公立學校校長高博愛、一為四川代表吳永珊、其會計為中國實業銀行行長李雍、幹事二人、一為法國特派駐華管理華工委員蘇榮理、一為現任留法勤工儉學會代表洪誠。」

(64)

「留法儉學會之招待所」『時報』民國八年七月二十日所載。「上海留法儉學會、因各省赴法儉學學生日多來滬後、分寓各處頗難接洽、刻由該會代表洪秉端（洪誠）君、在二洋涇橋全安棧、設立招待所、專事招待赴法儉學學生。且全安棧可容五百餘客、各處學生假寓該棧、不致有人滿之虞云。」

(65)

「上海留法儉學會消息」『時報』民國八年七月二十九日所載。「該會為優待會員及擴張會務起見、現擬組織一俱樂部。內設有各種有益於身體之遊戲、并另設一藏書室、專備各種有益之愛國小說探偵小說及關係新思潮之書籍、以冀喚起國民之愛國心、增長國民之新思想。現正在積極進行中、想不久定可成立也。地點約在尚賢堂、因該處距該會甚近、而地方又甚適當也。」

(66)

「華法教育會之籌款」『時報』民國八年七月三十一日所載。「華法教育會會長張繼等、昨致函各界云、……今當大戰之後中法關係日進於密切之時、以上諸事尤為當務之急、業經本會次第舉行。惟需款頗巨、繼續為艱。然當此切要之時、又萬不容其中輟。擬請熱心諸公慨

(67)

捐巨款以利進行、中國教育與實業之前途受惠至大、非僅本會感企已也。茲將與辦各事與助款指定之用途、附列於後」。この後には本文二〇三頁の「中佛教育會大綱」を具體化したものが列記されている。「留法勤工儉學會中華職業教育社擬合辦留法勤工儉學預備科通告」

「時報」民國八年九月十日所載。「……此時國內正全力提倡製造國貨、於應用工藝人才相需更亟。而法幣價值低落、預計此時赴法川資及赴法後未入工廠以前一二個月之旅費、共有國幣三百圓已勉可應用。誠爲苦學生留學之絕好時機。因由本會本社協商、就本社創立之中華職業學校、附設留法勤工儉學預備科、利用校中固有之機械工場。已習法語者、專事補習工藝爲甲組、以兩個月爲期、每人每月納費八元。未習法語者、日間習法語、夜間習工藝爲乙組、以一年爲期、每人每月納費十元（膳宿費均在內）。期滿由本會照料送往法國、擔任介紹入工廠工作。茲特會同通知」。この預備科は、九月二十一日に

林蔭路の江蘇省教育會で入學試験を實施し、甲組（定員二十名）、乙組（定員四十名）は「國文、法文、法語、體格」、甲組（定員四十名）は「國文、體格」について、二時間の試験を行ない、競争率はいずれも四倍におよんだ（「留法預備科明日試験」『時報』民國八年九月二十日所載）。

(68)

「華法教育會二次開會紀略」『時報』民國八年十月十三日所載。「廣東分會經已成立、昨假座東國國會議員俱樂部、開第二次大會、討論進行事宜。是日赴會者數十人、強半爲法國人士。四時開會、提議擬選年選派中國留學生留學法國、以本城法領事內之不崇書院故址爲遊學預備科館。……至留學經費、以法國村鄉學校爲最廉、每人年祇三四百金、擬多派中國青年遊學於該村鄉學校、務使造就多數留學人材云」。なお、中國側理事には、陳其璣、伍大光、黃強が選ばれた。

(69)

にもかかわらず、次のような不祥事件もおこっていた。「留法勤工儉學會中之敗類」『時報』民國八年十一月一日所載。「留法勤工儉學會、前投法公堂、控閩人洪誠私行假借會中及銀行名義、在外募捐、並在輪船上舞弊留法儉學生洋銀、查悉後向論不理、旋即逃至北京地方、求請移提訊追等語。現經中西官、核准備文、飭探程子卿

フランス勤工儉學運動小史（上）

(70)

前往北京、將洪移案、於昨日解送法公堂」。擔當者の獨斷專行を許していた中佛教育會の杜撰な體質が、このような汚職をまねいたのである。しかも、この體質は後年フランスでより大きな汚職事件をひきおこすことになる。洪誠の汚職については、「留法儉學討論會紀事」『時報』民國八年九月二十五日所載及び「留法儉學會之進行」同上二十六日所載も参照のこと。

（備考）

（一）出國狀況の欄は、次の『時報』記事によって作成した。

三月十八日「留法勤工儉學會學生首途」

三月三十一日「第二批留法學生出發」

四月十四日「學生會送別留法學生」

七月十二日「留法學生明晨出發」

八月十三日「留法學生今日放洋」

八月二十六日「赴法學生之首途」

九月二十九日「歡送赴法學生之紀事」

十月二十九日「華法教育會歡送赴法學生」

十二月九日「華法教育會之歡送會」

十二月二十六日「關於留法學生之紀載」

（二）出國狀況の備考欄は、團體名と有名な人名のみを記した。なお、三月三十一日、四月十四日、七月十三日、八月十三日、十月三十一日の出國者については、ほぼ全員の氏名を『時報』記事で確認できる。

（三）到着狀況の欄は、莊啓「留法勤工儉學」『教育雜誌』第十二卷第六號（民國九年六月二十日）所收の「留法勤工儉學會招待人數」を、人數及び月日を考慮しながら、出國狀況に適當に對應させたにすぎない。したがって、見當ちがひもありうる。出國から到着までの人數の増加は、香港、シンガポールなどで乗り

こんだ者があつたためかもしれない。減少は、フランス以外のイギリス、ドイツなどに行つた者があるため、とも考えられる。(四)『時報』記事では、三月十三日を第一次、三月三十一日を第二次、とんで十二月九日を第八次、十二月二十五日を第九次と明記しているが、その間のものについては次数をまったくつけていない。出國は合計十次であるから、どれかが次数から省かれ

出國狀況 (上海)				到着狀況	
月 日	人 數	船 名	備 考	月 日	人 數
3. 18	89	因幡丸		5. 15	95
3. 31	26	賀茂丸		5. 18	25
4. 14	2	伊豫丸		6. 6	3
~~~~~ 五 四 運 動 ~~~~~					
7. 13	60餘	三島丸	京津留佛儉學會 羅學瓚	9. 2	58
8. 13	79	メナム號	四川留佛勤工儉學會, 陳毅	10. 4	27
8. 25	50	アンドレレボン號			
9. 29	40餘	ポートルス號		11. 25	45
10. 31	150	ポールルカ號	李維漢, 張昆弟	12. 7	204
12. 9	158	スフィンクス號	江浙留佛同學會	1. 14	150
12. 25	50	アンドレレボン號	蔡和森, 向警予, 蔡暢	1. 26	96
總 計 704+α				703	

ることになる。

(71) 「李石曾之勤工儉學談」『時報』民國九年二月二十八日所載に次のようにいう。「由去年五月至十二月、到法學生約六百人。勤工居三分之二、儉學居三分之一」。

(72) 「留法儉學生電止選送」『時報』民國九年一月十一日所載。「聞第十屆學生、將於本月十五號左右出發。惟此次均係儉學生而無勤工儉學」。

(73) 「留法儉學生放洋紀」『時報』民國九年十二月十五日。「華法教育會所送男女學生、今日附智利號放洋。此爲第十七次出發」。

(74) 卞孝萱 前掲書 一九二頁。